

多賀城市文化財調査報告書第21集

市川橋遺跡

— 平成元年度発掘調査報告書 —

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

市川橋遺跡

— 平成元年度発掘調査報告書 —

序

多賀城市は、仙台市と接するためベッドタウン化が進み、人口の増加には著しいものがあります。本市は、特別史跡多賀城跡を有し、毎年史跡の整備・復元を行い、「史跡のまち」として広く県内外にアピールを行っています。この多賀城跡を取り巻く遺跡の一つに市川橋遺跡があります。

さて、今回の調査では、水田跡、井戸跡等が発見され古代の土器類も多量に出土いたしました。この中には、城外では初めて須恵器の杯に付着した漆紙文書も見つかり、貴重な発見となりました。

本報告書が研究者及び一般市民の方々にも広く活用され、埋蔵文化財に対する普及、啓蒙に役立てば幸いです。

最後になりましたが、報告書作成にあたっては、県文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所及び東北歴史資料館のご協力を得、さらに本遺跡発見の漆紙文書については、国立歴史民俗資料館の平川南氏より玉稿をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤 一司

例　　言

1. 本書は、宅地造成に先立って行った市川橋遺跡の発掘調査報告書（第7次調査）である。
2. 本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、石川健英が担当した。
3. 本書の作成にあたっては、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子、山田紀子の協力を得た。
4. 本書中における各遺構の略号は次の通りである。
S E—井戸跡、S D—溝跡、S K—土塁
5. 本書挿図中の水系レベルは、標高値を示す。
6. 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
7. 本報告書中の土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1976）を使用した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、県文化財保護課、多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館の諸氏、酒井清治氏（埼玉県立歴史資料館）の御教示、御協力を得た。
9. 墨書き器の判読については、平川南氏（国立歴史民俗博物館）、佐藤和彦氏（多賀城第二中学校）の協力を得た。
10. 「市川橋遺跡第7次調査出土の漆紙文書について」は国立歴史民俗博物館教授平川南氏の執筆による。
11. 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存管理している。

調査要項

1. 遺跡所在地 多賀城市浮島字高平34・35番
2. 調査期間 平成元年4月20日～7月7日
3. 調査面積 900m²（対象面積約2,000m²）
4. 調査主体者 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
5. 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 斎藤一司 主任研究員 高倉敏明
研究員 滝口 卓、石川俊英 技師 千葉孝弥、石本 敏、相沢清利
嘱託 鈴木久夫、滝川ちかこ
6. 調査協力者 加藤 基（地権者）、（社）多賀城市シルバー人材センター、多賀城市第二給食センター
7. 発掘調査参加者 阿部トシ子、阿部美津子、小野寺恵子、加藤文一、木村梅子、熊谷きみ江、熊谷好子、後藤恵子、佐藤節子、下道博信、平山節子、星忠次郎、渡辺ゆき子、米澤栄子
(多賀城市シルバー人材センター) 大石利雄、佐藤信次郎、鈴木次郎、鈴木忠三郎、高橋春生、山家幸治、若林 猛、千葉良一、前田仁水

本文目次

序文	
例言・調査要項	
I 市川橋遺跡の立地と環境	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査方法と経過	3
IV 調査成果	6
1. 基本層位	6
2. 発見遺構と遺物	11
(1)整地層	11
(2)水田跡	13
(3)井戸跡	19
(4)溝跡	21
(5)土塙	26
(6)堆積層出土遺物	32
V まとめ	34

市川橋遺跡第7次調査出土の捺紙文書について

国立歴史民俗博物館 平川 南

I 市川橋遺跡の立地と環境

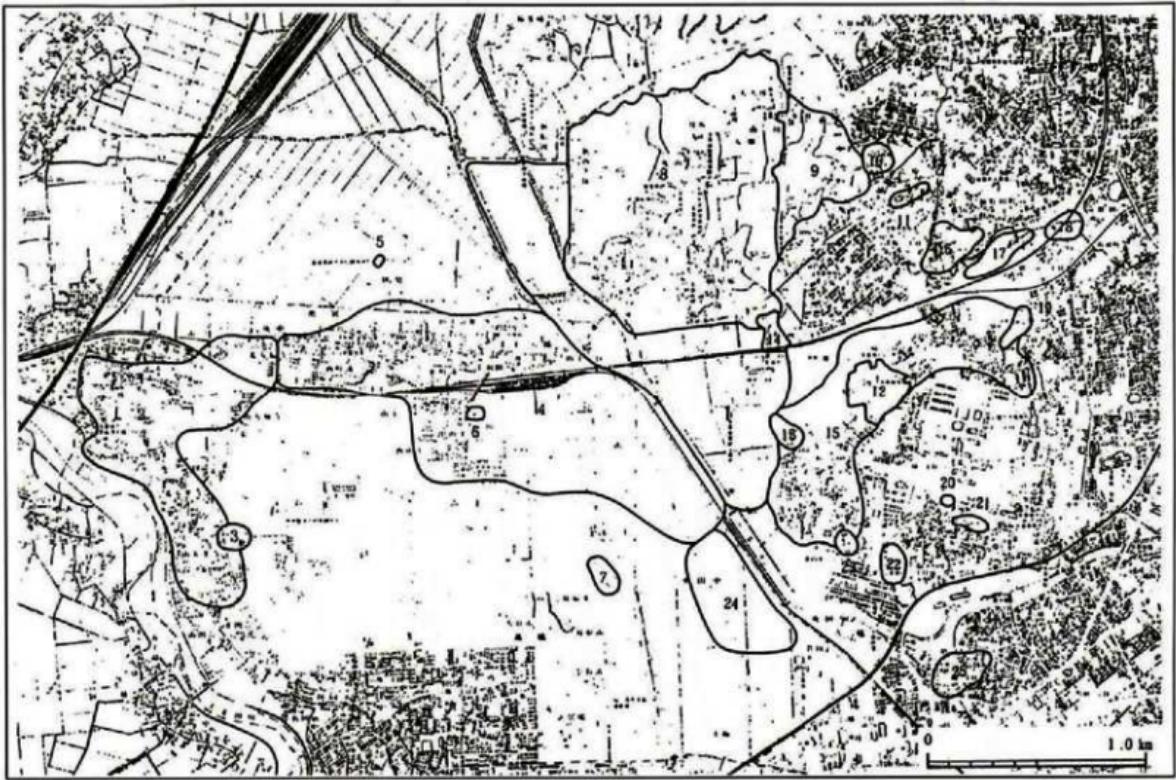
市川橋遺跡は、砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。本遺跡は特別史跡多賀城跡の南面及び西面に位置し、その範囲は東西1.4km、南北1.6kmと広範囲に及んでいる。遺跡周辺は地理的には広義の仙台平野の北東端にあたり、その北側には塩釜方面から西に派生する松島丘陵があり、この丘陵の先端部に多賀城跡が置かれている。丘陵は沖積地に接するまで標高を徐々に減じていく。

さて、本遺跡と同じ立地条件をもつ遺跡に、新田・山王遺跡がある。両者とも古墳時代前期から中・近世にかけての複合遺跡であり、多賀城跡との関連から、奈良・平安時代の遺構・遺物が多い。これらの遺跡及び本遺跡、さらに立地を異にする高崎遺跡は多賀城と密接にかかわると考えられている。上記の遺跡は、発掘調査によって新しい事実が次々に発見され、多賀城跡との関連はもちろんのこと、これを取り巻く周辺遺跡の様相を考える上でますます重要性を増している。本遺跡及び地域的に関連する遺跡については、これまでに数ヶ所で発掘調査が実施されている。これらの調査結果の概要は表2にまとめたとおりである。

II 調査に至る経緯

特別史跡多賀城跡の南面及び西面に位置する本遺跡は、新田・山王・高崎遺跡と共に、いわゆる国府城を形成する上で重要な位置にあたる。当該地区は主として水田に利用されており、仙台市と隣接し宅地化の波が著しい新田・山王遺跡と比較すれば、まだ歴史的景観を保っている。しかし、ここ数年来大規模な開発行為は及んでいないものの、小規模ではあるが当該地区でも宅地化の傾向が徐々に進んできている。当埋蔵文化財調査センターでは、これまでにも本遺跡が多賀城跡南面に位置するという重要性を考え、昭和54年度より継続して調査を実施し、開発行為に対応しつつ、資料の蓄積につとめてきた。

今回の発掘調査については、昭和63年度に入り地権者から宅地造成工事の計画が提示されたため、その内容等について協議を行った。その結果、当該地区は平安時代の水田跡が発見された第5次調査地区の北東部に接し、同様な性格を有する遺構・遺物の存在が十分に予想された。そのため地権者に対し調査実施の協力を依頼し、平成元年1月発掘調査の承諾書の提出を受け、同年4月14日より調査を実施したものである。



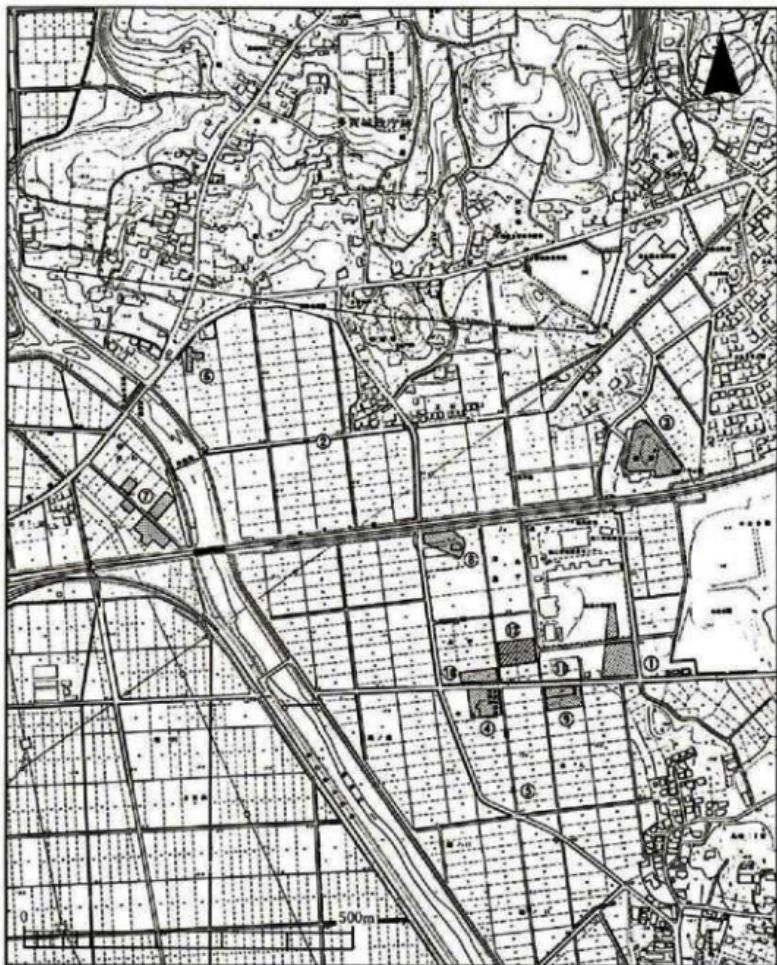
第1図 遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	市川橋遺跡	市川・浮島・高崎	自然堤防	集落跡・水路跡	奈良・平安・中世
2	新田遺跡	新田・山王	・	集落跡	古墳・奈良・平安・中世
3	安楽寺遺跡	新田	・	寺院跡	古代・中世
4	山王遺跡	山王・南宮	・	集落跡	古墳一近世
5	内能館跡	南宮	・	館跡	中世
6	山地田跡	山王	・	・	・
7	大日北道跡	高崎字大日北	・	散布路	奈良・平安
8	特別史跡多賀城跡	市川・浮島	丘陵	国府跡	奈良・平安・中世
9	西沢遺跡	・	・	散布地	奈良・平安
10	法性院遺跡	浮島字高原	・	・	・
11	高原遺跡	・	・	・	・
12	特別史跡多賀城廐寺跡	高崎一丁目・二丁目	・	寺院跡	・
13	丸山廐古墳群	高崎二丁目	丘陵	高塚古墳(円)	古墳
14	越前遺跡	浮島字越前	分離丘陵	官衙・施設跡	平安・中世
15	高崎遺跡	高崎・留ヶ谷	丘陵	散布地	奈良・平安・中世
16	小沢原遺跡	浮島二丁目	・	散布地・越路	奈良・平安
17	野田館跡	留ヶ谷二丁目	・	散布地・越路	奈良・平安・中世
18	矢作ヶ館跡	・	・	・	・
19	留ヶ谷遺跡	留ヶ谷一丁目	・	・	・
20	福井殿古墳	高崎三丁目	・	高塚古墳(円)	古墳(後)
21	桜井館跡	中央一丁目	・	館跡	中世
22	志引遺跡	東田中二丁目	・	窑舍地・越路	旧石器・奈良・平安・中世
23	東田中宿前遺跡	東田中一丁目	丘陵	散布地・越路	奈良・平安・中世
24	六賀田遺跡	八幡・東田中・高峰	自然堤防	散布地	奈良・平安
25	八幡館跡	八幡二丁目	丘陵	散布地・越路	奈良・平安・中世

表1 遺跡地名表

III 調査方法と経過

今回調査対象となった地点は、昭和59年度に多賀城市教育委員会が実施した第5次調査区の北東側に位置する所であり、遺構や遺物が濃密に分布することが十分に予想された。調査対象面積は約2,000m²で排土処理の関係上約900m²について調査を実施した。調査はまず重機を導入して表土（現代の水田耕作土）の除去作業を行った（4月20日）。翌21日から作業員を動員して調査区に沿って土層観察用のトレンチを兼ねた排水溝を掘った。5月8日から遺構検出作業に入る。この時点で遺構は主として西側に集中していることが判明したため、調査を西側中心に進めて行くことにした。北西部には整地層及び方形状に分布する黒色土があり、さらに数条の溝跡が複雑に入り組んだ様相を呈していた。このような状況のため遺構の重複関係が明白になるまでかなりの時間を必要とした。精査の結果、方形状に分布する黒色土については水田跡であることが明らかになり、2時期の存在が確認され、SD199・202はこれに伴う水路ではないかと考えるに至った。さらに整地層、水田跡、他遺構群についても、整地層を介在して2時期の遺構が存在することも判明した。一方、東側は遺構の分布が希薄であり、整地層も及んでいないため、発見された遺構の全ては地山面から掘り込まれたものであった。このような状況



No.	調査名 称	調査年次	No.	調査名 称	調査年次
①	多賀城跡第22次調査	昭和48年	⑦	市教委第1・2次調査	昭和56・57年
②	仙塙流域下水道試掘調査	昭和53年	⑧	市教委第3次調査	昭和58年
●	越前遺跡発掘調査	昭和54年	⑨	市教委第4次調査	昭和58年
④	水入遺跡発掘調査	昭和54年	⑩	市教委第5次調査	昭和61年
⑤	下水道埋設工事試掘調査	昭和54年	⑪	市教委第6次調査	昭和61年
⑥	多賀城跡第37次調査	昭和55年	⑫	市教委第7次調査	昭和61年

第2図 調査区位置図

調査年次	調査担当	調査地・面積	時代	発見遺構	発見遺物
昭和48年度 (註1)	宮城県多賀城跡 調査研究所	浮島字高平 1.650m ²	平安時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡	土師器、須恵器、灰釉・ 綠釉陶器、瓦、土製力 マド
昭和54年度 10/22-12/3 (註2)	宮城県 教育委員会	高崎字水入 2.000m ²	平安時代	掘立柱建物跡 溝跡、井戸跡 土塙等	土師器、須恵器、赤焼 き土器、灰釉・綠釉陶 器、瓦、硯、木製品
昭和58年度 10/3~10/27 (註3)	多賀城市 教育委員会	浮島字高平 (大臣宮地区) 460m ²	平安時代	掘立柱建物跡 小柱穴	土師器、須恵器、赤焼 き土器、瓦
昭和58年度 1/9-2/20 (註4)	多賀城市 教育委員会	高崎字水入 500m ²	平安時代 江戸時代	溝跡	土師器、須恵器、赤焼 き土器、瓦、灰釉陶器 硯石、木製品(旗、鉢、盤 類、引、鏡、壺、瓶、匙、刀) 鉄製品(劍、刀)
昭和59年度 10/22-1/21 (註5)	多賀城市 教育委員会	高崎字高平 800m ²	平安時代 江戸時代	掘立柱建物跡 掘立柱列跡 小柱穴、水田 跡、溝跡 水田跡	土師器、須恵器、赤焼 土器、灰釉・綠釉陶器 瓦、円面硯、土鍤、土 製力マド、木製品(旗、盤 類、刀)、古銭、陶磁器、 金属製品(鎧、刀、鏡、戈)
昭和61年度 11/4-12/17 (註6)	多賀城市 教育委員会	高崎字水入 700m ²	平安時代 中世	土塙、杭列跡 河川状遺構 溝跡	土師器、須恵器、瓦、 陶磁器、木製品(旗、盤 類)

表2 市川橋遺跡調査成果

が把握された5月29日より3m×3mの平面図作成用の杭を設定し、直ちに平面図及び略図作成に取りかかった。6月3日より、調査区西側の整地層を除去し、下層（地山面）の調査を開始する。井戸跡、土塙などを発見する。これらの遺構群については、確認時の所見では全て地山面から掘り込まれたものと考えていた。しかし整地層との関係から整地層上面より掘り込まれた可能性も考えられた。このため、再度検討を行った結果、当初の見解どおり地山面から掘り込まれた遺構であることを再確認した。この中には曲物を二段に据えて井戸側としたS E19 8井戸跡、S K236土塙がある。特にS K236土塙からは平城京土器分類で言ういわゆる「壺G」が出土した。これは当該地域では初めての発見である。6月29日には調査区全景写真撮影を行う。基本層位等の検討及び平面図作成を行って全ての調査を完了した（7月7日）。

なお、調査完了後、整理作業中において水田跡（195）出土の須恵器杯に付着した漆紙を発見した。直ちに東北歴史資料館内で赤外線テレビカメラを使用して判読作業を行った結果、文書であることが判明した。漆紙文書の発見は城外では初めてのことである。

IV 調査成果

1. 基本層位

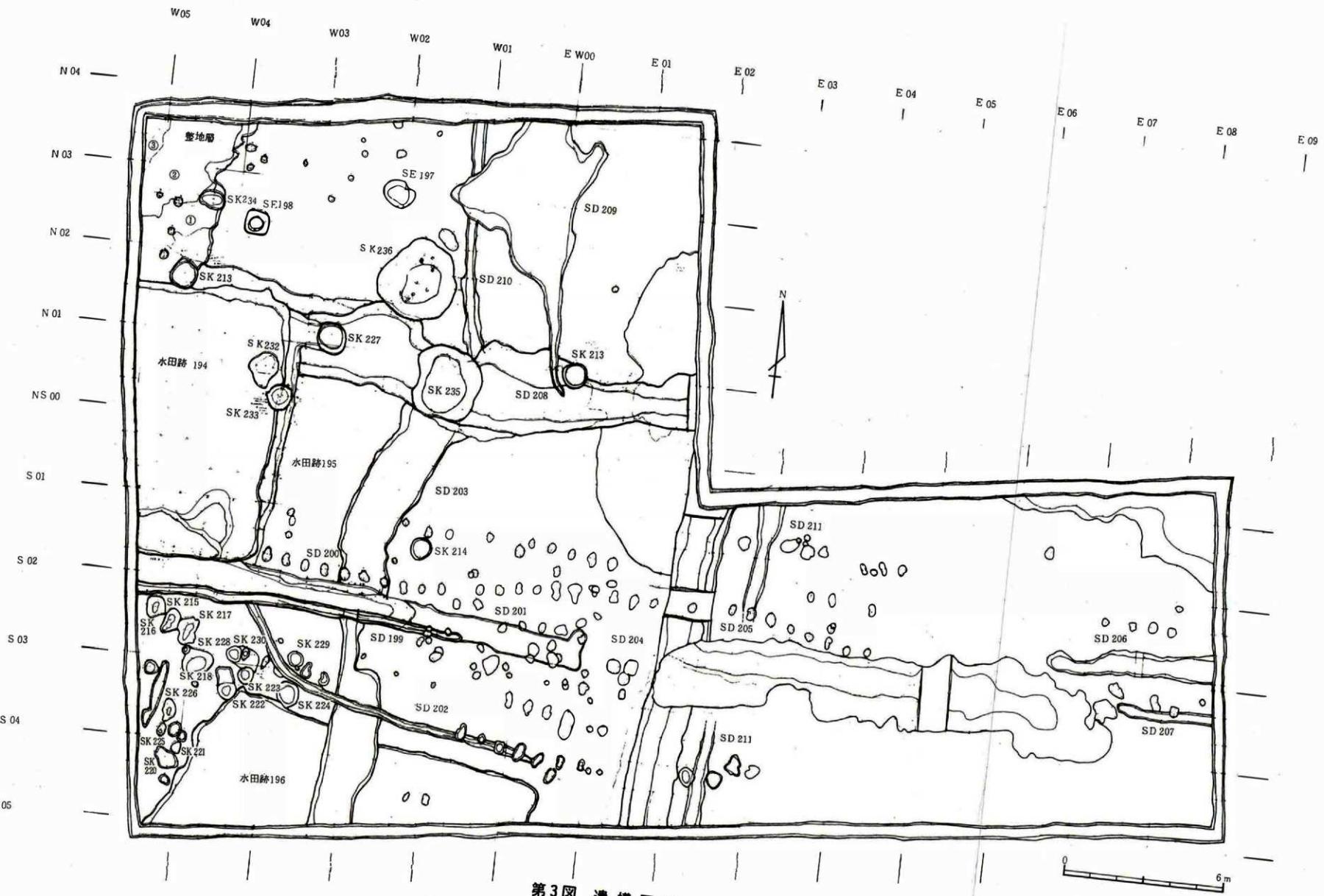
第Ⅰ層 現在の水田耕作土である。黒褐色粘質土層で、層中に酸化鉄を斑点状に含むものである。厚さ15~20cmを計り、調査区全域にはほぼ水平に堆積している。

第Ⅱ層 にぶい黄褐色粘質土層である。層中には酸化鉄及びマンガン粒を含んでいる。厚さ10~20cmを計り、調査区全域に水平に堆積している。

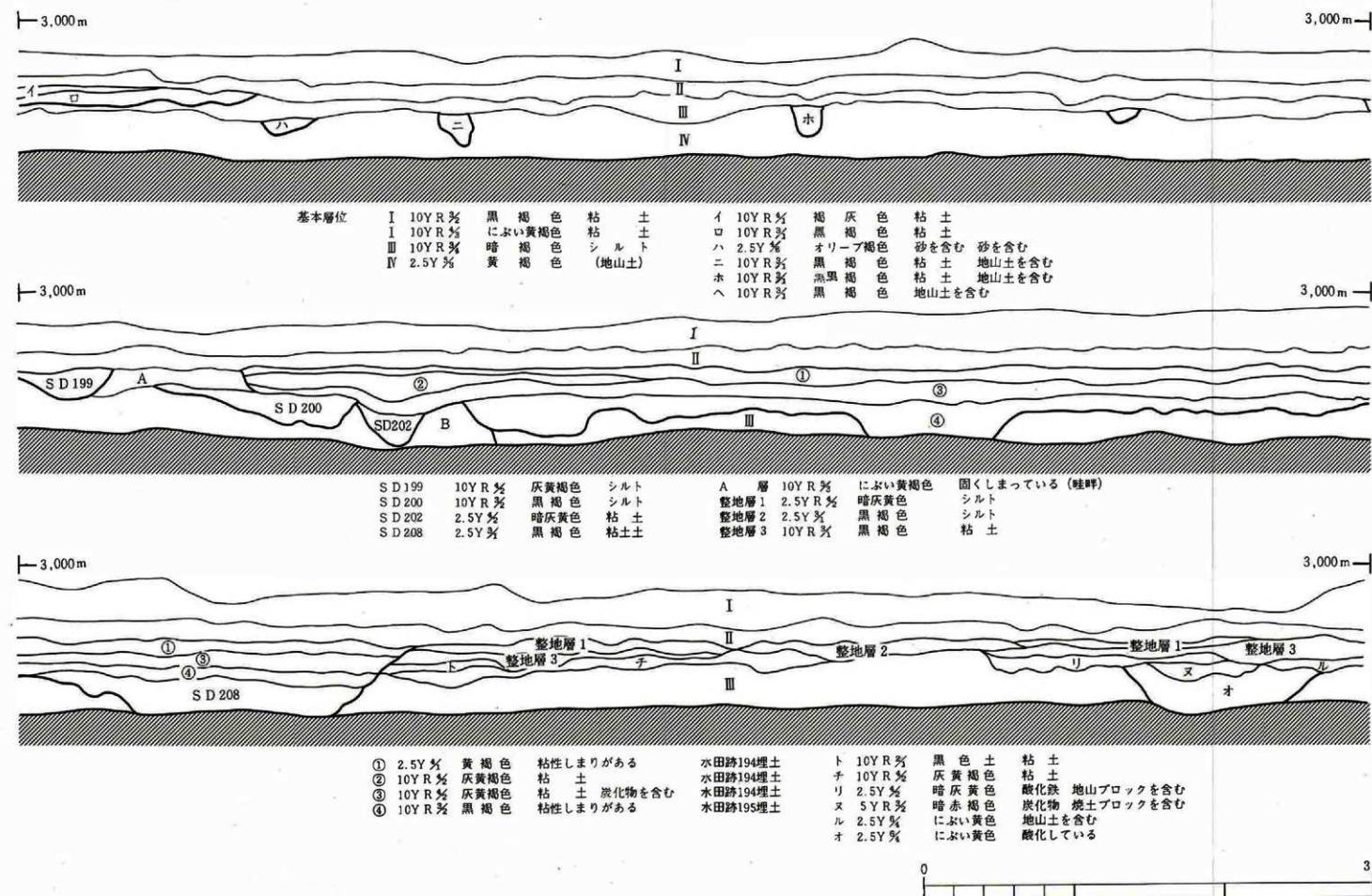
第Ⅲ層 黏性のある暗褐色シルト層である。層中には酸化鉄及び地山土が含まれている。調査区の南西部から南東部に分布するものであり、地山土に比較的類似する。

第Ⅳ層 黄褐色シルト層（地山土）である。

なお、北西部で発見された堆積層については、これに覆われた遺構の埋土状況等から判断して、整地層と考えている。



第3図 遺構配置図



第4図 調査区西側セクション図

2. 発見遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は水田跡3、井戸跡2基、溝跡14条、土塁24基、整地、小柱穴多数である。

(1) 整地層

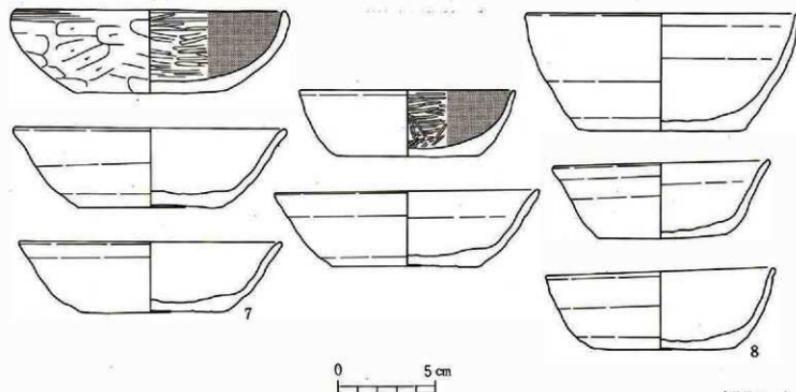
整地層は調査区北西コーナー部から中央部にかけて発見された。堆積状況より3層に細分される。

整地1：調査区北西コーナー付近に堆積する。層厚は約5～6cmほどである。暗灰黄色土層で、層中には砂、マンガン粒子、酸化鉄などを含む。

整地2：1と同様北西コーナー付近に堆積する。層厚は10cm前後である。黒褐色土層で、マンガン粒子、酸化鉄を含む。

整地3：調査区北西から水田跡194北側に及んでいる。層厚は約8～10cmほどである。黒褐色土層で、地山ブロック、酸化鉄を含んでいる。

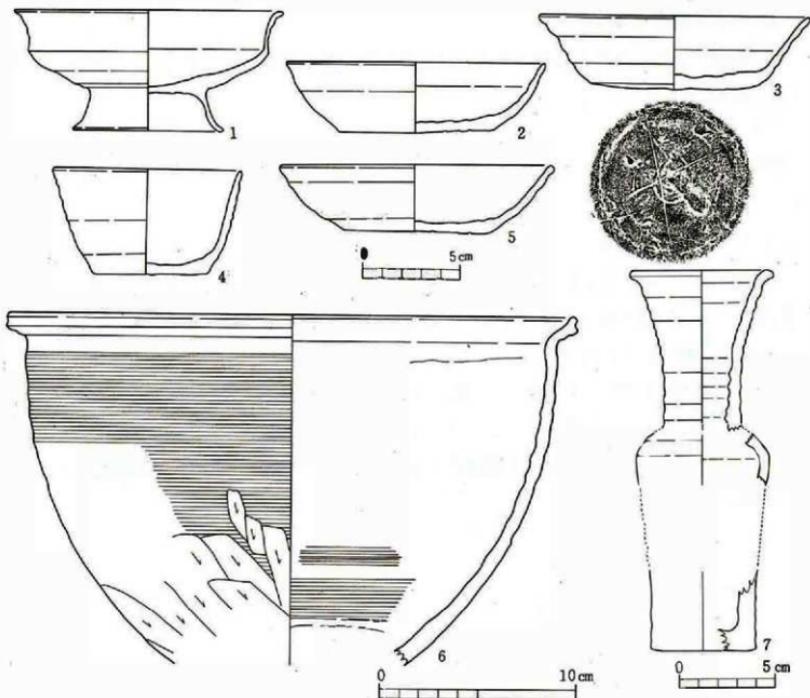
これらの層中からは、主として土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・長頸瓶などが出土している。



(単位: cm)

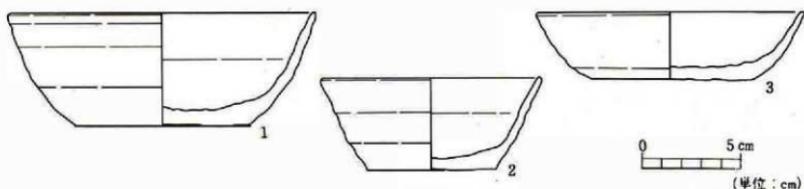
No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	整地1	土師器	杯	ヨコナデ、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	14.3	7.7	4.3	
2	整地1	・	・	ロクロナデ、回転水切り	・	(11.1)	7.4	3.4	
3	整地1	須恵器	・	・	ロクロナデ	(14.0)	(8.7)	6.0	
4	整地1	・	・	・	・	14.1	7.4	4.1	
5	整地1	・	・	・	・	13.6	7.6	3.9	
6	整地1	・	・	・	・	10.6	6.7	3.9	
7	整地1	・	・	・	・	13.6	7.6	3.7	ほぼ完形
8	整地1	・	・	・	・	11.7	7.1	4.0	

第5図 整地層出土遺物



(単位:cm)

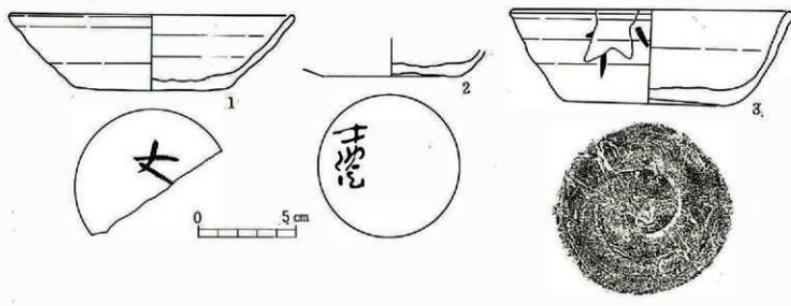
No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	整地 2	須恵器	横柄	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	13.6	—	6.1	高台径(7.6)
2	整地 2	*	杯	*	回転ヘラ切り	13.2	7.9	3.6	
3	整地 2	*	*	*	*	(13.8)	8.4	3.7	
4	整地 2	*	*	*	*	9.6	5.9	5.4	
5	整地 2	*	*	*	*	14.0	7.6	—	
6	整地 2	*	甕	手持ちヘラケズリ	*	(29.0)	—	3.4	
7	整地 2	*	長柄瓶	回転糸切り	*	7.5	(5.5)	—	肩部径(6.9)



(単位:cm)

No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	整地 3	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	(15.6)	8.8	5.8	
2	整地 3	*	*	*	*	(11.3)	6.6	4.7	
3	整地 3	*	*	*	*	13.6	8.2	3.4	

第6図 整地層出土遺物



(単位: cm)

No.	層位	器種	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	広径	器高	墨書き
1	整地3	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	(14.6)	8.0	3.9	「丈」
2	整地1	ク	ク	ク	ク	—	7.2	—	「口」
3	整地2	ク	ク	ク	ク	14.5	9.2	4.8	「口」

第7図 整地層出土遺物

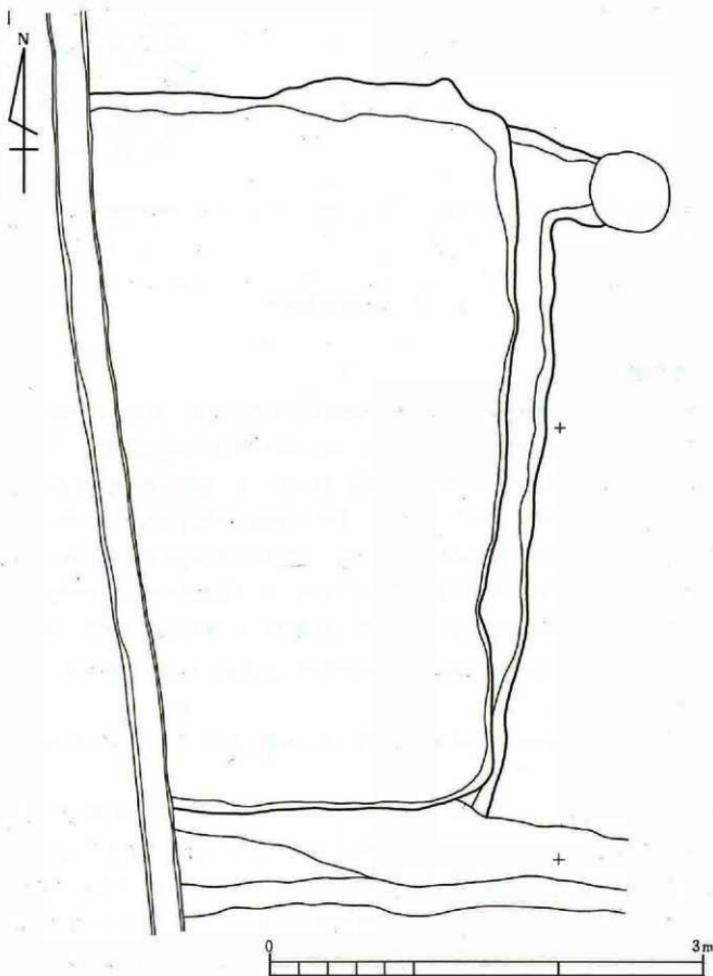
(2) 水田跡

水田跡194：水田跡は調査区西側の地山上で検出したものである。本遺構は北西コーナー部から分布する整地層を切っている。水田跡195、S D200・202・208とも重複し、これらより新しい。平面形は方形状を呈し、ほぼ発掘基準線に沿っている。規模は南北約10.0m、東西についてはその延びが調査区外に及んでいるため、全体の規模は不明となっているが、約5.6mまで検出した。畦畔は調査区南側より検出している。上半分は削平のため不明となっている。方向は東側に向かっているが、埋土が地山土に近似するにぶい黄褐色土層のため明確な区分はできなかった。土は比較的固くしまっていた。水田の耕作土は4層に細分できた。下層より黒褐色、灰黄褐色、黄灰色土層の順に堆積している状況が見られた。いずれの層も砂、マンガン粒子、酸化鉄を含んでいる。

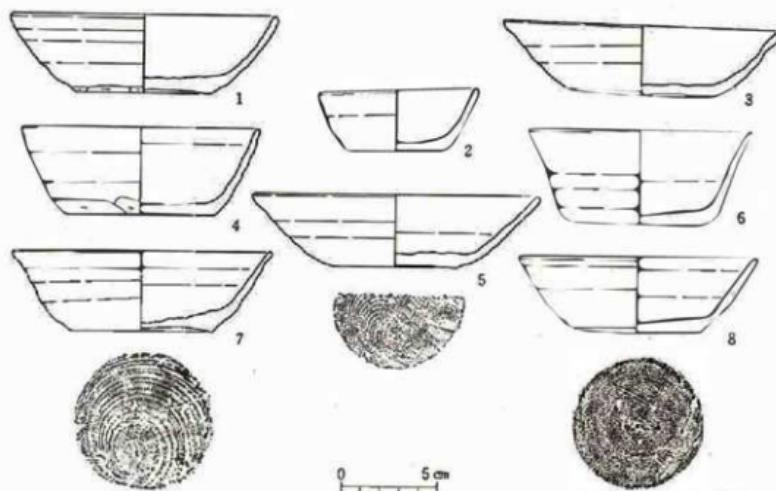
出土遺物は比較的豊富であり、土師器杯・壺・高台付瓶、軒丸瓦、軒平瓦、円面覗、円盤状土製品がある。

水田跡195：水田跡194とほぼ同位置で194を掘り上げてから検出している。S D200・208、S K232・233と重複し、S D208より新しく、S D200、S K232・233より古い。規模は、遺構の延びが194同様調査区外に及んでいるため全容については不明であるが、東西7.1m、南北約8.2mまで検出した。畦畔は調査区南側より検出した。方向はS D202にほぼ沿っている。土は地山土に黒色土が混じったもので、固くしまっている。耕作土は黒褐色土層に地山土が混じったもので、かなり攪拌されている。

出土遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・高杯脚部・甕・稜椀・短頸壺がある、さらに須恵器杯に付着した漆紙文書が発見されている（第11図）。

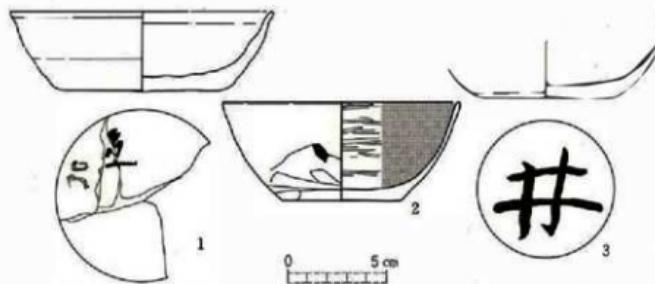


第8図 水田跡194・195実測図



(単位: cm)

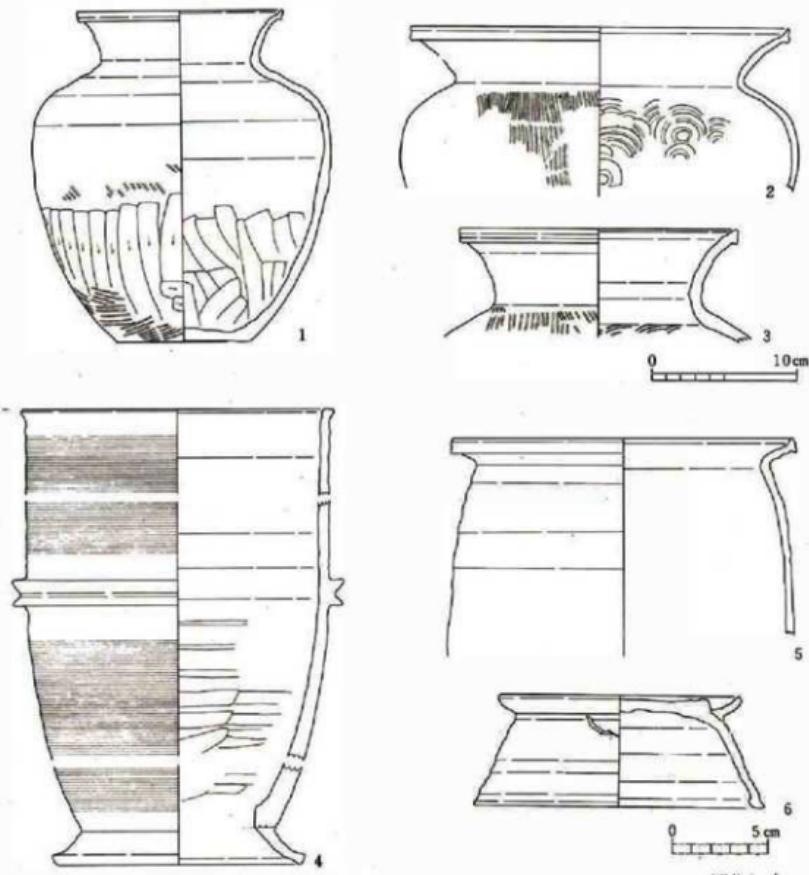
No.	層位	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	£ - 3	須恵器	杯	ロクロナデ, 直線切口, 手持ちハテケズリ	ロクロナデ	(14.0)	6.8	4.1	
2	£ - 3	+	+	*	*	8.4	5.2	3.2	
3	£ - 2	+	+	回転ヘラ切り	*	19.5	7.7	3.7	
4	£ - 3	+	+	回転ヘタケズリ	*	(12.4)	7.8	4.6	
5	£ - 2	+	+	直線ホタケズリ	*	(15.0)	6.5	3.8	
6	£ - 3	+	+	回転ヘラ切り	*	(11.6)	7.2	4.9	
7	£ - 3	+	+	回転ホタケズリ	*	(13.6)	7.4	4.2	
8	£ - 2	+	+	直線ヘタケズリ	*	(12.4)	6.8	4.0	正盤ヘラ基盤X3



(単位: cm)

No.	層位	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	£ - 1	須恵器	杯	ロクロナデ, 回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.1	7.6	4.1	
2	£ - 3	土師器	+	回転ホタケズリ, 手持ちハテケズリ	*	12.0	6.0	5.0	
3	£ - 3	須恵器	+	回転ヘラ切り	*	—	7.0	—	「井」

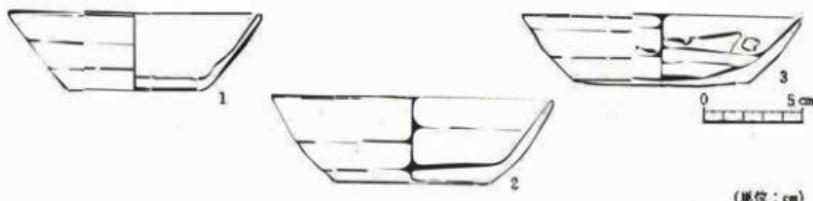
第9図 水田跡194出土遺物（その1）



(単位: cm)

No	位置	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	£-2	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ、手持らヘラケズリ	(14.2)	(9.2)	22.8	
2	£-2	*	*	ロクロナデ、青海波當て具痕	+ 平行卯キ	(26.0)	—	—	
3	£-1	*	*	*	+	(19.2)	—	—	
4	£-3	*	壺	カキ目	+	(21.7)	(23.2)	17.5	
5	£-3	土師器	壺	+	+	23.9	—	—	
6	£-3		円錐狀	+	+	(12.8)	—	(15.2)	残部 7.2cm

第10図 水田跡194出土遺物（その2）



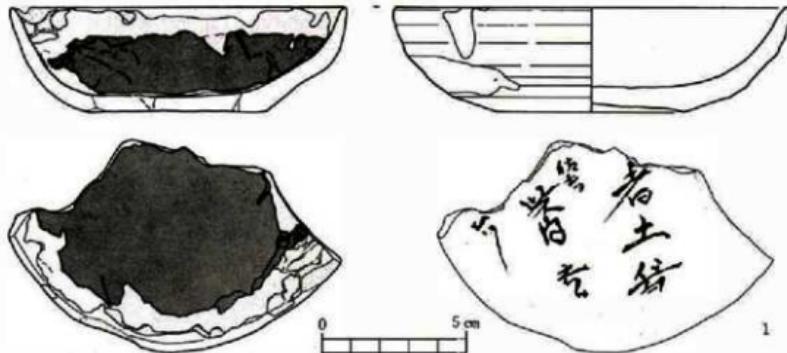
(単位:cm)

No.	層位	器種	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	高さ	備考
1	E-1	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.0	6.8	4.0	
2	E-1	*	*	*	ロクロナデ	14.4	7.8	4.3	
3	E-1	*	*	*	*	(14.2)	9.0	3.6	体部外面に墨模?



(単位:cm)

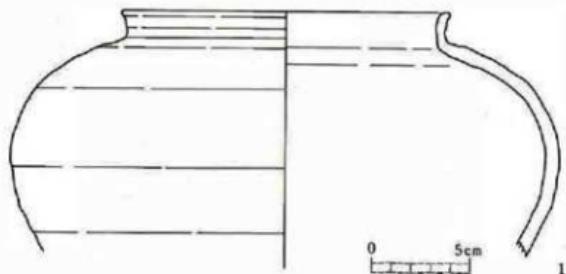
No.	層位	器種	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	高さ	備考
1	E-1	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	11.8	6.6	4.7	「中」記号
2	E-1	*	*	*	*	—	7.4	—	「中」



(単位:cm)

No.	層位	器種	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	高さ	備考
1	E-1	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラズリ	ロクロナデ、回転ヘラズリ	13.6	(6.4)	4.1	墨模文書

第11図 水田跡195出土遺物（その1）



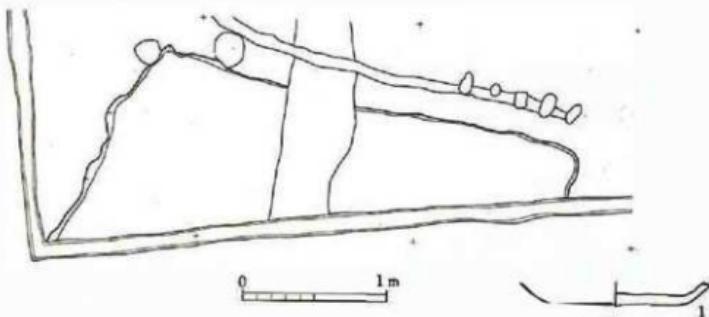
(単位: cm)

No.	層位	器種	名形	外面調査	内面調査	口径	底径	基高	最高
1	t-1	須恵器	延輪盃	ロクロナデ	ロクロナデ	16.7	—	—	最大径: 27.8

第12図 水田跡195出土遺物（その2）

水田跡196：水田跡196は調査区南側の地山上で検出したものである。遺構は削平を受け遺存状態は良好ではなかった。S D203、S K222・224と重複し、これらより古い。平面形は方形状を呈するものと考えられるが、遺構の延びが南側に及んでいたため全容はつかめなかつたが、東西約12.1m、南北最大約6.2mまで検出している。畦畔は確認できなかつた。耕作土は195と同一で、黒褐色土層と地山土が混じりあつた層で攪拌されている。

層中より土師器杯・甕・蓋、円面観が出土している。



第13図 水田跡196実測図



(単位: cm)

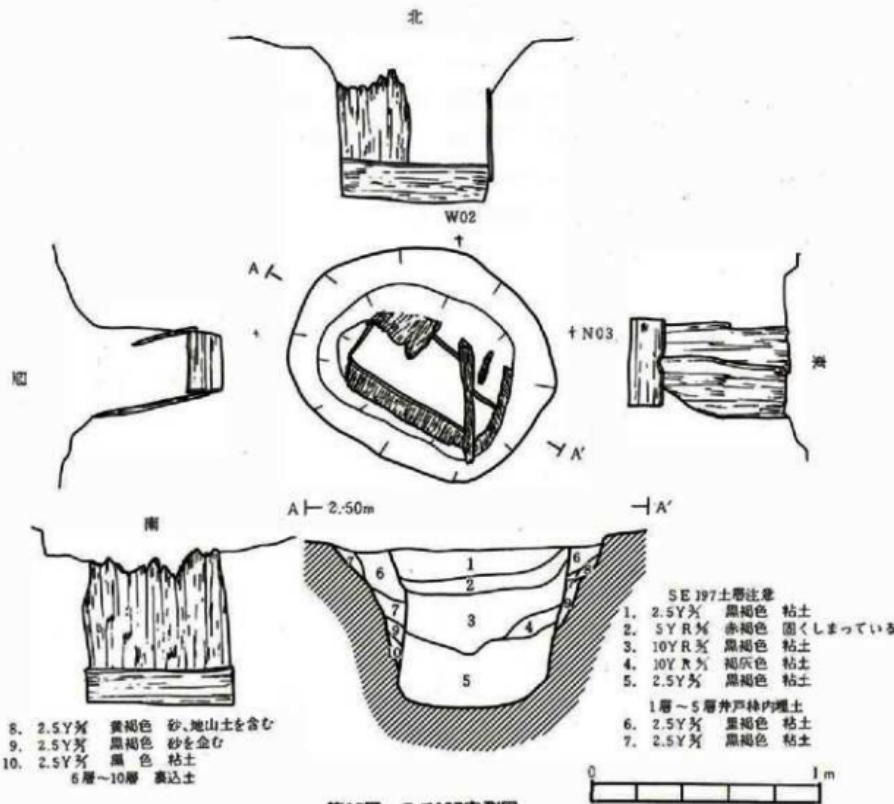
No.	層位	器種	名形	外面調査	内面調査	口径	底径	基高	最高
1	t-1	須恵器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.1)	—	「矢田」

第14図 水田跡196出土遺物

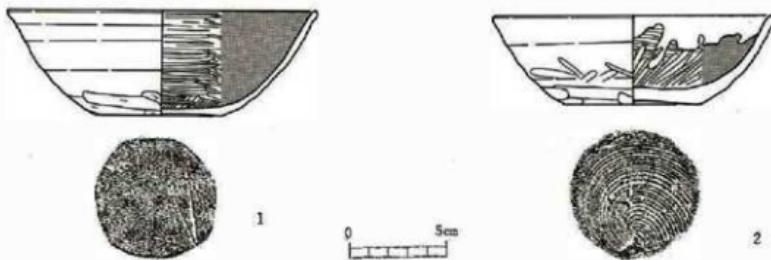
(3) 井戸跡

SE 197井戸跡：S E 197井戸跡は調査区北側の地山上で検出された、木組みの井戸側をもつ井戸跡である。検出面から底面までは約0.8mを計り、掘り方は長辺1.12m、短辺0.95mの方形状を呈している。井戸の構造について見ると、板を各辺1枚ないし2枚縱方向に置いて外枠とし、その内側下部にも板を枠状に組んだものを据えている。外枠の遺存状況は東側が非常に悪い。埋土について見ると、井戸内埋土は、5層の堆積層に分けられる。上層（1～2層）は酸化鉄を多く含み、下層（3～5層）には粘土を主体とした黒褐色土が厚く堆積している。裏込め土は、黒褐色、黒色を呈した砂、粘土を主体としている。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。



第15図 S E 197実測図

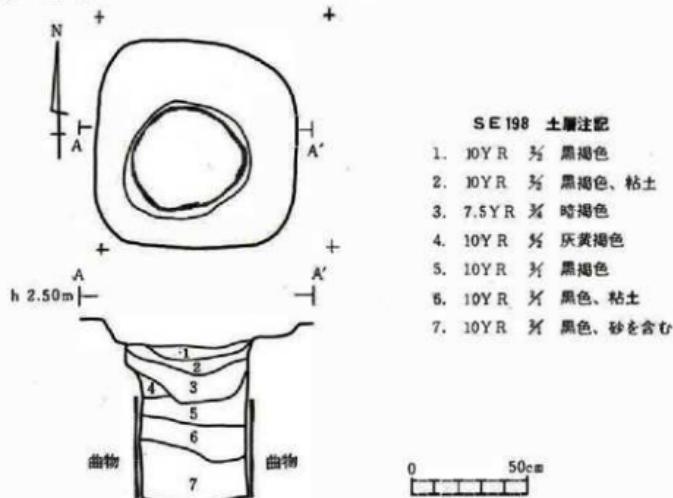


No.	層位	形態	色調	外 壁 質 量		内 面 質 量		口徑	底径	器高	(単位: cm)
				上部	下部	上部	下部				
1	E-5	土師器	灰	ロクロナギ、手持ちヘラケズリ		ヘラミガキ、黒色処理		15.7	6.4	5.4	丸形
2	E-5	*	*	*	圓盤形切り	*	*	14.2	6.8	4.5	*

第16図 SE 197出土遺物

SE 198井戸跡：SE 198井戸跡は、調査区北西部の整地層下で検出された井戸跡である。平面形は方形を呈し、長辺約0.9m、短辺約0.86mを計り、深さは約0.8mである。井戸の構造は、曲物を二段に掘えたものである。曲物は遺存状態が悪く、裏込め土のまま取り上げたため詳細は不明である。井戸側内埋土は、7層に細分された。上層（1～4層）には黒褐色、暗褐色、灰黄褐色土が堆積し、層中には炭化物、酸化鉄、砂を含んでいる。下層（5～7）には砂層を主体とする黒褐色、黒色土が厚く堆積している。

遺物は出土していない。



第17図 SE 198実測図

(4) 溝跡

S D 199溝跡：S D199溝跡は、調査区南西側の地山上で検出した東西溝跡である。S D200～203と重複関係にありこれらより新しい。本溝の西側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約12.2mまで検出した。断面形は「U」字型を呈している。幅は0.22～0.43mを計り、深さは最大0.2m程である。埋土は灰黄褐色土の單一層で、層中に酸化鉄、砂、マンガン粒子等を含んでいる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・長頸瓶が出土している。

S D 200溝跡：S D200溝跡は、溝の南側を S D199と接する位置で検出した東西溝跡である。水田跡194、S D199・201～203と重複関係があり、水田跡194、S D199より古く、S D201～203より新しい。本溝の西側は調査区外にその延びが及んでいるためその全容は不明であるが、長さ約10.4mまで検出した。断面形は舟底形を呈している。幅は最大約1.36mを計り、深さは最大約0.2mを計る。埋土は黒褐色土の單一層である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

S D 201溝跡：S D201溝跡は、調査区西侧中央部の地山上で検出した東西溝跡である。S D199・200と重複関係にあり、これらより古い。溝は西側が S D199・200によって失われているため、長さ約6.3mまで検出したにすぎない。幅は0.89～1.04mを計り、深さは5cm前後を残すだけである。埋土は灰色土の單一層である。

層中より土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

S D 202溝跡：S D202溝跡は調査区西侧の地山上で検出した東西溝跡である。水田跡194、S D199～201・203と重複関係にあり、水田跡194、S D199～201より古く、203より新しい。本溝の西側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約17.2mまで検出した。断面形は「U」字型を呈し、幅は最大で0.57m、深さは最大0.2mを計る。埋土は暗灰黄色の單一層である。層中には地山土をブロック状に含んでいる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・高杯脚部・蓋が出土している。

S D 203溝跡：S D203溝跡は調査区西侧の地山上で検出した南北溝跡である。水田跡196、S D199・200・202・208と重複関係にあり、水田跡196より新しく、他の全ての溝跡より古い。溝は北側が S D208によって失われ、南側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約15.5mまで検出した。断面形は底面が平坦面を呈し、壁は底面より緩やかに立ち上がる。幅は0.54～2.18mを計り、深さは最大0.15mである。埋土は2層に分けられ、上層には黒褐色粘土層が堆積し、下層には黄色土シルトが堆積している。

遺物は土師器杯・高杯脚部・蓋が出土している。

S D 204溝跡：S D204溝跡は調査区中央部の地山上で検出された南北溝跡である。S D205・208・212と重複関係にあり、S D205より新しく、他の溝跡より古い。溝は北側が S D208によ

って失われ、南側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約14.2mまで検出した。断面形は舟底形を呈し、幅は1.2~1.4mを計り、深さは0.25mである。埋土は3層に細分される。上層には粘性のある黒褐色土が堆積し、下層には灰黄褐色土を主体とする砂質土が堆積している。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋・長頸瓶が出土している。

S D 205溝跡：S D205溝跡は調査区中央部の地山上で検出した南北溝跡である。S D204・212と重複関係にあり、これらより古い。規模は全長約11.6mまで検出した。溝の大部分はS D204によって失われているため幅、深さは不明である。埋土は灰黄褐色土を残すのみである。

層中からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋・長頸瓶が出土している。

S D 206溝跡：S D206溝跡は調査区東側の地山上で検出した東西溝跡である。本溝の東側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約6.2mまで検出した。幅は0.47~1.05mを計り、深さは0.12mである。埋土は黒褐色粘土層で、地山土、マンガン粒子、酸化鉄を含んでいる。遺物は出土していない。

S D 207溝跡：S D207溝跡は調査区東側の地山上、S D206の南側で検出した東西溝跡である。本溝の東側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約3.6mまで検出した。幅は約0.4mを計り、深さは0.1mである。埋土は灰黄色粘土層で、地山土、マンガン粒子、酸化鉄を含んでいる。遺物は出土していない。

S D 208溝跡：S D208溝跡は調査区北側の地山上で検出した東西溝跡である。水田跡194・195、S D203・204・209・210、S K213・227・235・236と重複し、水田跡194・195、S D210、S K213・227・235・236より古く、S D203・204・209より新しい。溝は西側が水田跡195によって失われ、東側は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約14.5mまで検出した。壁は底面より緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸が認められる。幅は1.46~3.1mを計り、深さは平均して0.2m前後である。埋土は黒色土、黄褐色土、灰黄褐色土の3層に分けられる。これらの層は色調こそ異なるが、粘土を主体とする。

遺物は土師器杯、須恵器杯・甕・蓋・長頸瓶が出土している。

S D 209溝跡：S D209溝跡は調査区北東部の地山上で検出した南北溝跡である。溝は北側で幅が大きく膨らむ形態を取っている。S D208・210と重複関係にあり、これらより新しい。溝の南側はS D208の埋土上で停止するが、北側については調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約10.1mまで検出した。深さは最大0.2mまで埋土が残っていた。埋土は4層に分けられ、黄色褐色粘土、暗灰黄色、オリーブ褐色、灰オリーブ色砂質層の順に堆積している。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

S D 210溝跡：S D210溝跡は調査区北側中央部の地山上で検出した南北溝跡である。S K23

5. S D208・209と重複関係にあり、これらより古い。溝の南側はS K235、S D208によって失われ、北側については調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、長さ約8.7mまで検出した。幅は0.4~0.68mを計り、埋土はわずかに5cmほど残すだけであった。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

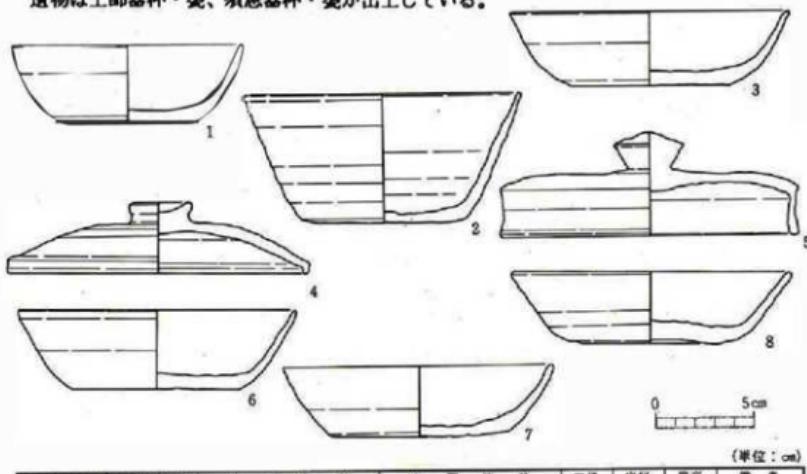
遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

S D211溝跡：S D211溝跡は調査区東側に地山上で、S D204・205とほぼ平行して走る南北溝跡である。S D212と重複関係にありこれより古い。溝の両端は調査区外にその延びが及んでいるため全容については不明であるが、全長約12.2mまで検出した。幅は0.48~0.89mを計る。埋土は壁際を参考にすると3層に分けられ、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土、黒褐色土が堆積している。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

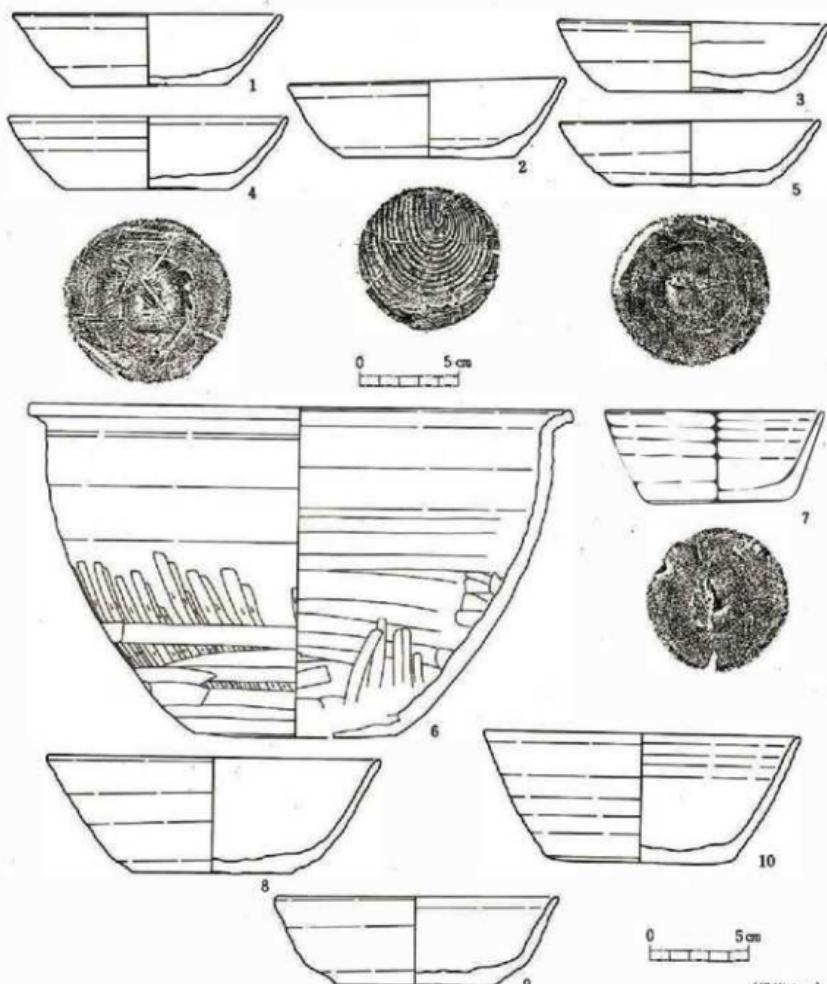
S D212溝跡：S D212溝跡は調査区東側で検出した東西溝跡である。S D204・205・211と重複しこれらより新しい。規模は全長17.2m、幅1.54~2.74mを計る。溝の底面にはかなりの凹凸が認められる。埋土は灰黄褐色土の単一層である。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。



第18図 溝跡出土遺物（その1）

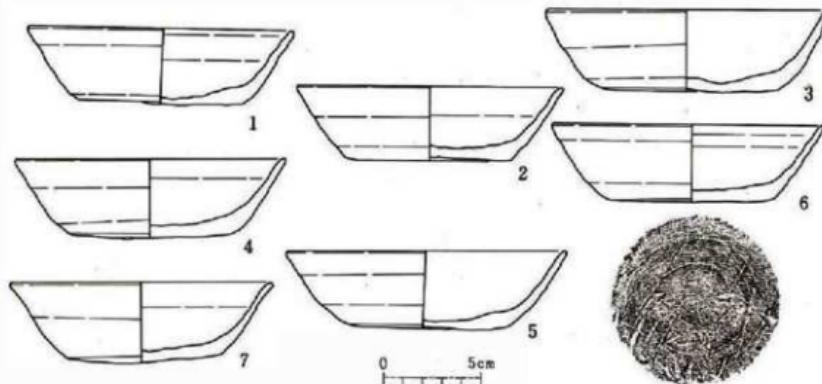
No.	番号	属性	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	高 さ	備 考
1	S D199	須恵器	杯	セテロナフ回転ヘリコイルヘリケツリ	ロクロナダ	(11.8)	6.5	4.0	
2	S D200	*	*	*	*	(14.1)	8.4	6.5	
3	S D201	*	*	*	*	(13.6)	8.5	3.7	
4	S D203	*	盃	*	*	15.5	—	3.6	
5	S D203	*	*	*	*	(15.3)	3.6	5.3	つまみ径 3.2
6	S D204	*	杯	*	*	(14.2)	8.5	4.0	
7	S D204	*	*	*	*	(13.8)	7.3	3.7	
8	S D204	*	*	回転尖切り	*	14.3	7.2	4.7	



(単位: cm)

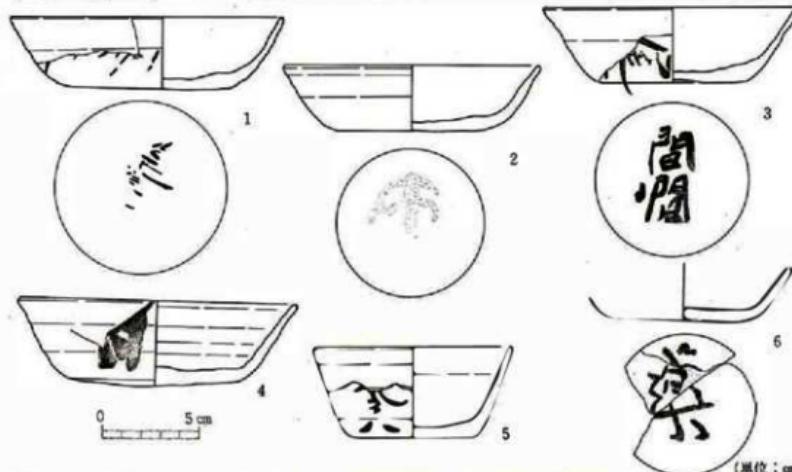
No	番号	器種	器形	外 面 調 査	内 面 調 査	口 径	底 径	高 さ	備 考
1	S D 204	須志器	杯	クロナデ、回転ヘラ切り	クロナデ	13.7	7.8	3.7	
2	S D 204	+	+	* 回転糸切り	*	14.1	8.6	4.0	
3	S D 204	+	+	* 回転ヘラ切り	*	(13.7)	8.4	3.5	
4	S D 204	+	+	*	*	(14.2)	8.4	3.7	
5	S D 204	+	+	*	*	13.2	8.0	3.3	
6	S D 204	+	空	手持らへラケズリ	工具状のナデ	37.6	13.8	21.7	
7	S D 209	+	杯	* 回転ヘラ切り	クロナデ	11.1	7.4	4.7	
8	S D 209	+	+	*	*	17.0	8.2	5.9	
9	S D 210	+	+	*	*	14.4	6.0	4.5	
10	S D 210	+	+	*	*	(16.0)	9.5	6.6	底部へラ筋X

第19図 満跡出土遺物（その2）



(単位: cm)

No	番号	器種	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	S D 210	須恵器	杯	ロクロナダ、回転ヘラ切り	ロクロナダ	(13.6)	8.5	3.9	
2	S D 210	*	*	*	*	(13.6)	8.5	3.8	
3	S D 210	*	*	*	*	14.3	9.1	4.2	
4	S D 210	*	*	*	*	13.9	8.5	4.0	
5	S D 211	*	*	*	*	14.4	8.2	4.3	
6	S D 211	*	*	*	*	13.8	8.6	4.0	
7	S D 211	*	*	*	*	13.5	8.0	4.1	



(単位: cm)

No	番号	器種	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	墨書き
1	S D 201	須恵器	杯	ロクロナダ、回転ヘラ切り	ロクロナダ	(13.2)	8.5	3.8	墨痕
2	S D 203	*	*	*	*	13.1	7.6	3.4	「□」
3	S D 203	*	*	*	*	(13.2)	7.9	3.9	「開闢」底部「RE □」
4	S D 203	*	*	*	*	14.3	7.7	4.4	「□」
5	S D 203	*	*	*	*	(10.2)	6.5	4.7	「□ハ」
6	S D 209	*	*	*	*	—	7.2	—	「□□」

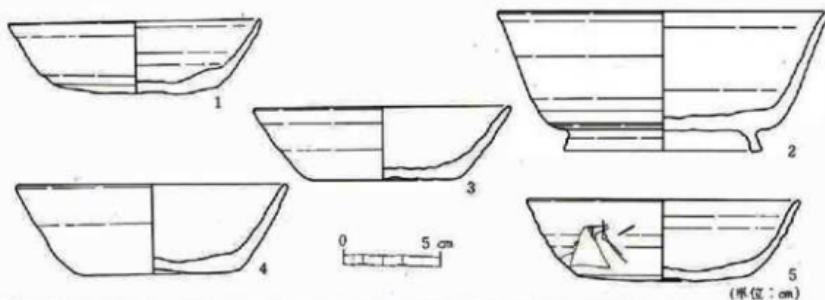
第20図 満跡出土遺物（その3）

(5) 土 塙

土塙は24基発見した。SK 236以外は、以下の表に示す。

連構名	平面形	検出面	規模(長辺×短辺×深さ)	重複関係	特記事項	備考
213	円 形	地 山	0.89×——×0.34	SD 208→SK 213		
214	円 形	地 山	0.77×——×0.3			
215	不整形	地 山	0.84×——×0.21		長辺はS.P	
216	不整形	地 山	0.89×——×0.22		長辺はS.P	
217	不整形	地 山	1.03×——×0.2	SK 217→SK 218	長辺はS.P	
218	不整形	地 山	1.18×——×0.2	SK 217→SK 218	長辺はS.P	
219	橢円形	地 山	0.42×——×0.18			
220	不整形	地 山	——×——×0.2			
221	不整形	地 山	0.3 ×——×0.08		長軸はS.P	
222	橢円形	地 山	0.7 ×——×0.20	水田跡196→SK 222		
223	橢円形	地 山	0.6 ×——×0.11			
224	橢円形	地 山	0.9 ×——×0.15	水田跡→SK 224		
225	不整形	地 山	——×——×0.03			
226	不整形	地 山	——×——×0.13			
227	円 形	SD 208埋土	1.06×——×0.24	SD 208→SK 227		
228	橢円形	地 山	0.61×0.56×0.16	SK 230→SK 228		
229	円 形	地 山	0.69×——×0.12			
230	方 形	地 山	0.71×——×0.1	SK 230→SK 228		
231	円 形	地 山	1.1 ×——×0.1		整地層除去後	
232	不整形	水田跡195埋土	——×——×——	水田跡195→SK 232		
233	円 形	水田跡196埋土	0.97×——×0.45	水田跡195→SK 233		
234	橢円形	地 山	0.8 ×0.64×0.23		整地層除去後	
235	不整形	地 山	2.83×——×——	SD 208→SK 235		

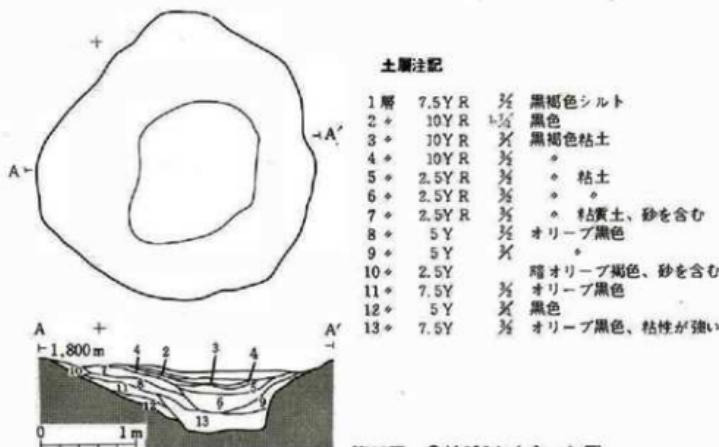
表3 土塙一覧表



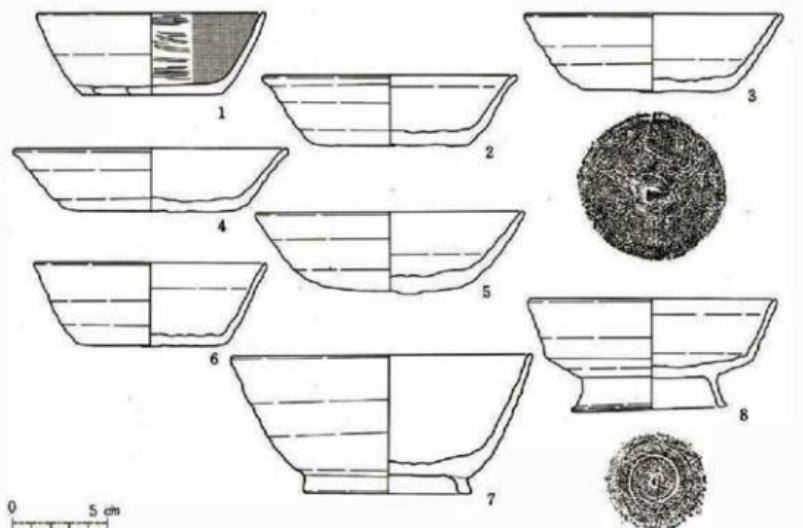
第21図 土塙出土遺物

SK 236土塙：SK 236土塙は、調査区中央部より、整地層除去後に発見したものである。SD 208と重複し、これより新しい。平面形は橢円形を呈し、規模は長辺約2.98m、短边約2.91mで、深さは約0.75mを計る。底面は平坦面を呈し、壁は東側が垂直気味に立ち上がり、西側は緩やかである。埋土は主体となる層が黒褐色、黒色、オリーブ黒色土である。上層は、埋土中に炭化物、酸化鉄を含む砂層が主体となっているのに対し、下層は砂層などを含む粘質土になっている。

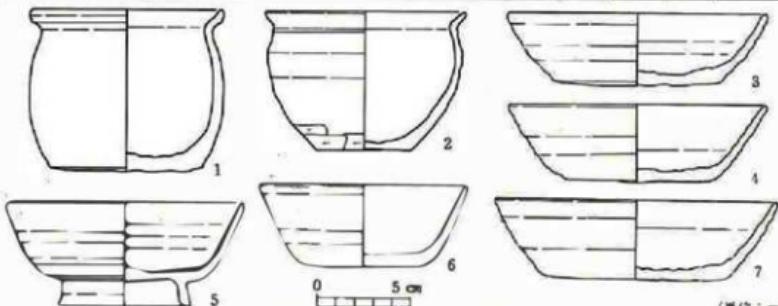
遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・稜瓶・長頸瓶、絵馬などが出土している。



第22図 SK 236セクション図

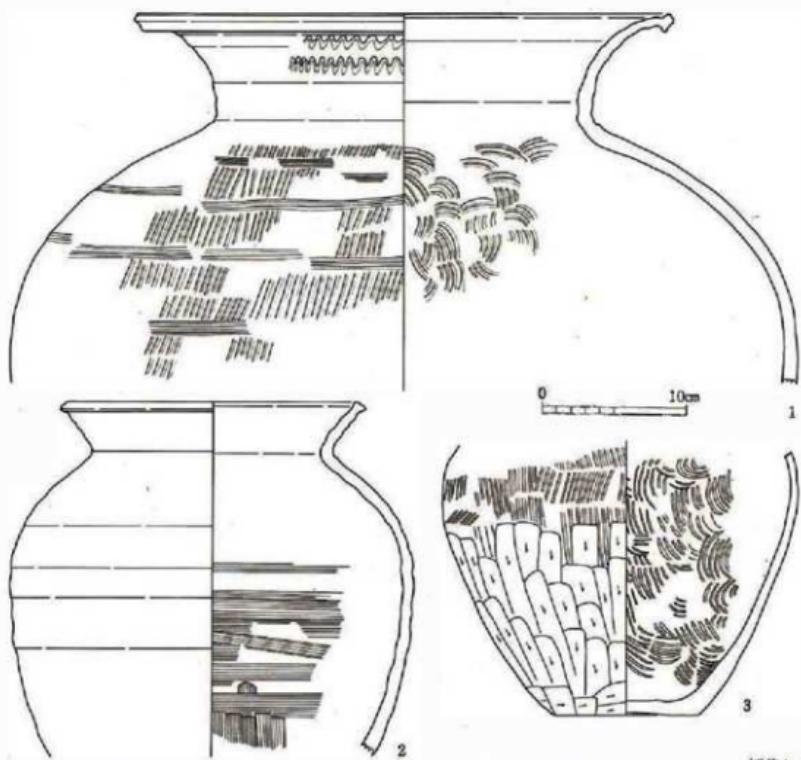


(単位: cm)									
No	層位	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	f-1	土師器	杯	クロナデ、手持ヘラケズリ	ハラミガキ、墨色処理	(12.0)	7.4	4.3	
2	f-1	須恵器	*	*	ロクロナデ	33.5	8.2	3.7	
3	f-1	*	*	*	*	13.5	5.7	4.1	
4	f-1	*	*	*	*	14.5	9.3	3.3	
5	f-1	*	*	*	*	(14.2)	7.6	4.3	
6	f-1	*	*	*	*	12.2	7.7	4.4	
7	f-1	*	高台付杯	*	*	16.0	8.9	7.3	
8	f-1	*	*	*	*	13.1	8.1	5.9	

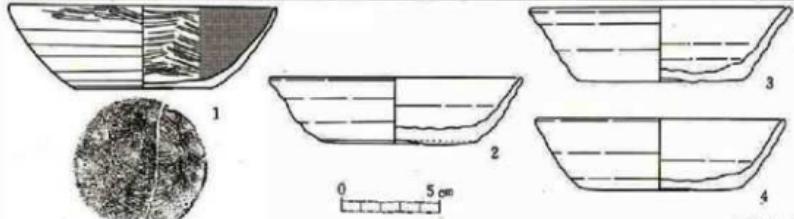


(単位: cm)									
No	層位	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	f-2	土師器	小形甌	クロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	(10.2)	8.0	8.3	
2	f-2	*	*	*	手持ヘラケズリ	(10.6)	5.0	7.3	
3	f-2	須恵器	杯	*	回転ヘラ切り	*	(13.5)	8.8	3.8
4	f-2	*	*	*	*	13.6	5.7	4.1	
5	f-2	*	高台付杯	*	*	12.4	—	5.5	高台径 6.8
6	f-2	*	杯	*	*	11.0	6.4	4.3	
7	f-2	*	*	*	*	14.8	(9.6)	4.2	

第23図 SK 236出土遺物（その1）

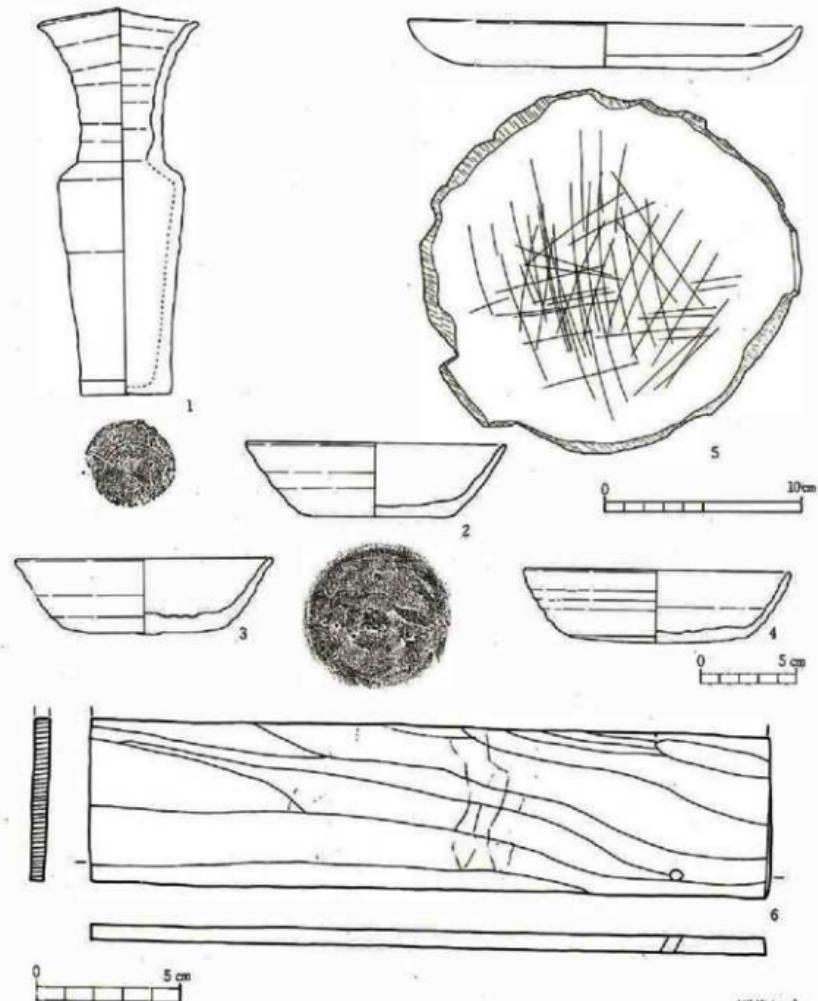


(単位: cm)									
No.	層位	器種	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	E-2	須恵器	甕	平行印き	青海波文当て具痕	(37.7)	—	—	
2	E-2	*	*	ロクロナデ	ロクロナデ、カキ目	(21.1)	—	—	最大径(27.9)
3	E-2	*	*	平行印き、手持ちハラケズリ	青海波文当て具痕	—	10.1	—	+(24.5)



(単位: cm)									
No.	層位	器種	当期	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	E-3	土師器	杯	ロクロナデ、凹部を切り、凸部へラケズリ	ヘラミガキ、墨色処理	14.1	7.2	4.4	
2	E-3	須恵器	*	*	ロクロナデ	13.4	8.3	3.5	
3	E-3	*	*	凹部を切り	*	13.8	8.7	3.9	
4	E-3	*	*	*	*	13.1	8.5	3.8	

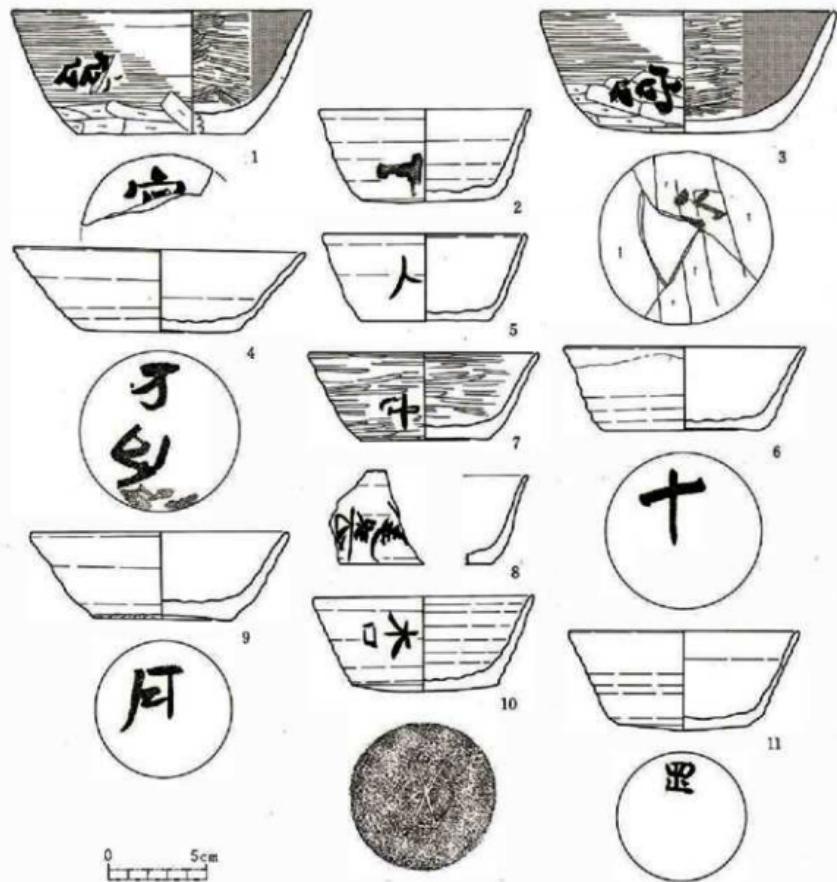
第24図 SK 236出土遺物（その2）



(単位: cm)

No.	層位	器種	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	E-4	須恵器	長頸瓶	ロクロナギ、四軒舟切り	ロクロナギ	8.4	4.7	20.2	最小径 6.5
2	E-4	*	杯	+ 回転ヘラ切り	*	13.7	8.3	3.9	
3	E-4	*	*	+	*	(13.5)	8.8	3.9	
4	E-4	*	*	+	+	(14.0)	9.2	3.7	
No.	層位	器種	器形	法 量				備考	
5	E-4	木製品	盤	口径20.1、高さ2.3 長さ23.5、幅5.7、板厚0.6				船馬、桟舟材	
6	E-4	*	*						

第25図 SK 236出土遺物（その3）



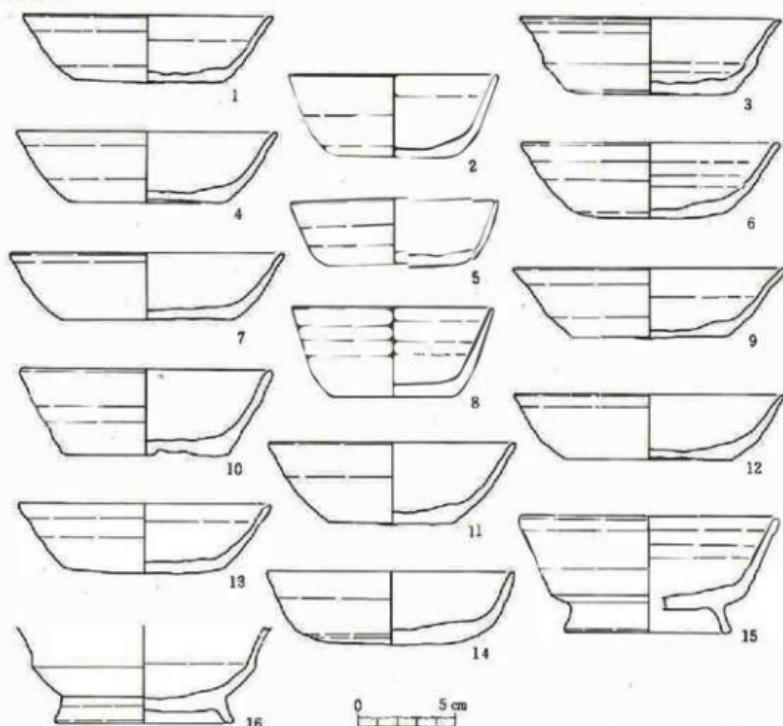
(単位: cm)

No.	形態	器種	形容	外面調査	内面調査	口径	底径	器高	基盤
1	£ - 1	土師器	杯	ヨコナダ、手持ちヘラケズリ	ヘラガキ、黒色処理	(15.2)	8.4	6.3	体盤「ロマ」「宮」
2	£ - 1	須恵器	*	ロクロナダ、回転ヘラ切り	ロクロナダ	10.7	6.8	4.7	「ト」
3	£ - 2	土師器	*	ヨコナダ、手持ちヘラケズリ	ヘラガキ、黒色処理	(15.0)	8.8	6.2	体盤「宮」
4	£ - 2	須恵器	*	ロクロナダ、回転ヘラ切り	ロクロナダ	14.9	8.1	4.1	「万」、「口」
5	£ - 2	*	*	*	*	(10.4)	6.6	4.4	「人」
6	£ - 3	*	*	*	*	12.3	7.9	4.2	「十」
7	£ - 4	*	*	ヘラミガキ	ヘラガキ	11.8	6.6	4.4	「中」
8	£ - 4	*	*	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	5.6	「尾添」
9	£ - 2	*	*	回転ネギリ	*	13.2	6.9	4.6	「月」
10	£ - 4	*	*	回転ヘラ切り	*	11.3	7.6	4.0	「木口」底部へク描き「X」
11	£ - 1	*	*	*	*	(11.7)	6.6	5.1	「足」

第26図 SK 236出土遺物（その4）

(6) 堆積層出土遺物

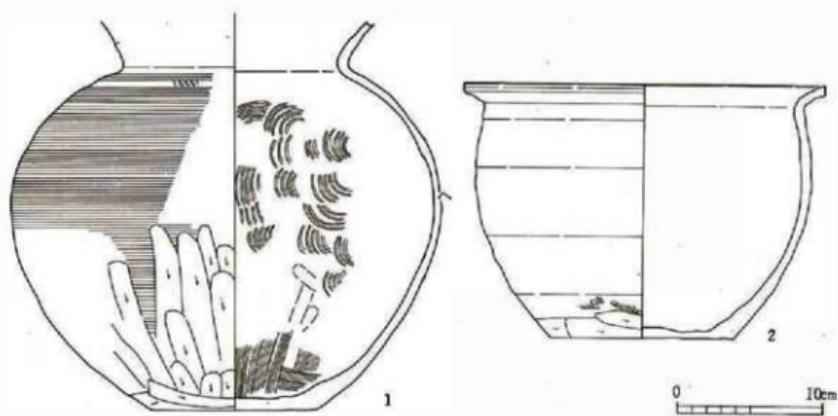
I～III層からは主として土師器、須恵器が出土している。量的には須恵器が多く、土師器は少ない。



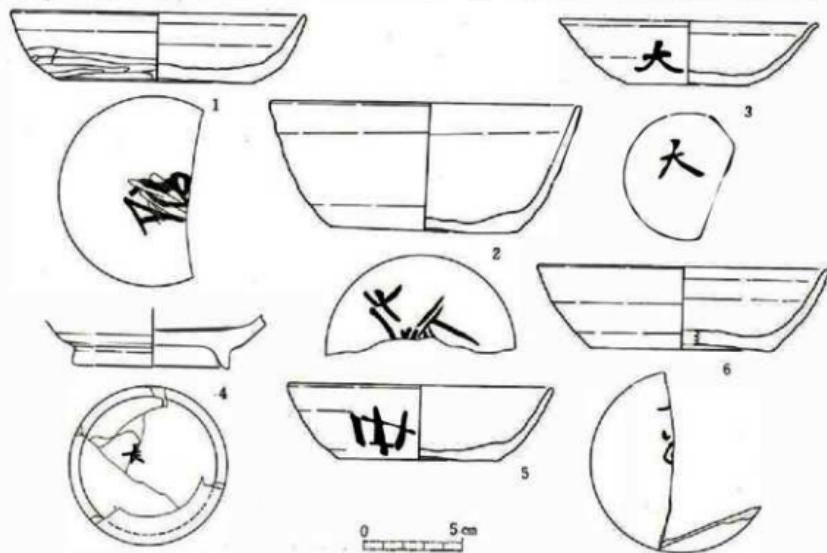
(単位: cm)

No.	層位	高さ	器種	器形	外 面 調 査	内 面 調 査	口径	底径	高さ	備 考
1	L-II	須恵器	杯	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ		13.1	7.8	3.5	
2	L-II	+	+	*	*	+	(10.8)	6.8	4.4	
3	L-II	+	+	*	*	+	(13.6)	8.8	4.0	
4	L-II	+	+	*	*	+	(13.6)	8.2	3.7	
5	L-II	+	+	*	*	+	10.8	7.2	3.4	
6	L-II	+	+	*	*	+	(12.4)	7.8	4.0	
7	L-II	+	+	*	*	+	(14.3)	(9.8)	3.5	
8	L-II	+	+	*	*	+	(10.5)	6.5	4.7	
9	L-II	+	+	*	*	+	(14.2)	8.1	3.7	
10	L-II	+	+	*	*	+	(13.2)	8.8	4.5	
11	L-II	+	+	*	*	+	(12.8)	6.6	4.3	
12	L-II	+	+	*	*	+	(14.1)	(8.6)	3.4	
13	L-II	~	+	*	*	+	(13.2)	8.4	3.6	
14	L-II	+	+	*	*	+	12.8	8.1	3.8	底部ヘラ描キ「X」
15	L-II	+	高台付杯	*	*	+	(13.6)	(8.8)	6.1	
16	L-II	+	+	*	*	*	—	—	—	高台径 9.4

第27図 堆積層出土遺物（その1）



No.	層位	器種	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	L-II	須恵器	盤	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	—	11.2	—	
2	L-II	*	*	*	*	(14.9)	12.6	17.5	最大径 29.7

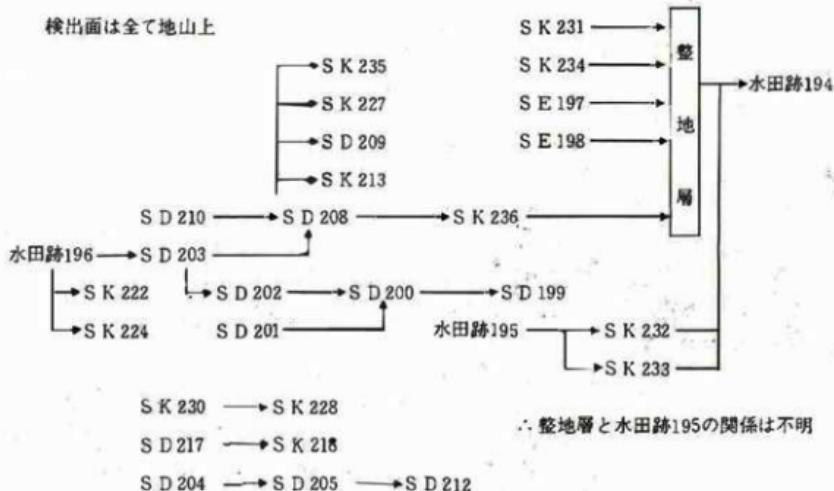


No.	層位	器種	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	L-II	須恵器	杯	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(15.1)	9.7	3.5	墨模
2	L-II	*	*	*	*	(15.8)	(9.5)	6.5	
3	L-II	*	*	*	*	(13.2)	6.4	3.2	「大」
4	L-II	*	高台付杯	*	*	—	—	—	「中」
5	L-II	*	杯	*	*	(13.5)	8.2	3.7	「高」高台径 8.1
6	L-II	*	*	*	回転ヘラ切	(14.8)	9.2	4.2	「中」

第28図 堆積層出土遺物（その2）

V ま と め

第7次調査で発見された遺構は、水田跡3、井戸跡2基、溝跡14条、土塁24基である。これらの遺構群を検出面及び重複関係より整理をおこなうと以下のような関係になる。



重複関係がないもの

S D 206
S D 207
S D 211

S K 214
S K 215
S K 216
S K 219
S K 220
S K 221
S K 225
S K 226

発見された遺構群は整地層を挟んで複雑に重複しあっている。この中で注目されるものに水田跡の存在がある。市川橋遺跡では昭和59年度に実施した調査で初めて水田跡の存在が確認されている。本調査区は、水田跡が確認された第5次調査区の北東に接する位置関係にあり、当該地区にもその延びが及んでいることが判明した。しかし今回は、プラントオバール等の自然科学的分析を行っていないこともあり、今後に課題を残した。水田跡と認定するためには、形状、畦畔や水口等の存在が不可欠の要素である。今回検出した遺構群の中で水田を構成するものとしては、水田跡194・畦畔・水路（S D199）、水田跡195・畦畔・水路（S D202）、水田跡196・（畦畔は確認できず）・水路（S D203）を考えている。

井戸跡は2基見つかっている。いずれも規模的には小さいものであるが、形態的には曲物を二段に据えたものと、縱方向に板材を巡らし、その内側にも横位に板材を固定したものであり、異なった形態を有している。

溝跡は14条検出した。ほぼ調査区全域にわたって見つかっている。前述のように水田の水路として機能していたものもある。方向についてみると、東西・南北方向に走るものがほとんどである。

土塙は24基検出した。大部分が調査区西側に分布する。平面形は、不整形を呈するものが多く、橢円形を呈するものがこれに続く。規模はSK235・236以外、長辺1m前後である。特にSK236は、長辺2.98m、短辺2.91mの大型のもので、埋土からは土師器、須恵器等の土器類が豊富に出土している。出土品には完形品が多く含まれるのが特徴である。

検出された遺構の構成から本地区の性格を見ると、水田跡の存在から居住域というよりはむしろ生産域といった様相を呈している。しかも井戸跡も存在することから、わずかではあるが、生活域といった一面もある。当該地は自然堤防と低湿地が複雑に入り組んだ場所にある。そこに整地事業を行い、生活空間を広げている。調査区内でも東側と西側では遺構分布の在り方が異なる点も興味深い。検出されたこれらの遺構群の年代については、出土した遺物の技法的な特徴から、概ね9世紀代と理解している。

なお、当地区は山王遺跡で発見された古代の道路跡の推定延長線上の北側にあたる。一方、推定道路跡の南側には昭和54年度に県文化財保護課が調査を実施した水入地区があり、ここでの発見遺構（建物跡、井戸跡、溝跡）の在り方と、本調査区で発見した遺構（水田跡、井戸跡、溝跡）を比較した時、その相違が単に古代における土地利用の違いなのかどうか、検討課題であるといえよう。

S K 236土塙出土遺物について

S K236土塙は、調査区北西部の整地層下で発見したものである。堆積層中からは、土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯・甕・稜椀が出土している。量的には須恵器杯が豊富であり墨書きされたものも多く、完形品が多く含まれる点が特徴である。しかもこれらの遺物以外に、平城京土器分類で「壺G」と呼ばれる須恵器の長頸瓶と、絵馬が出土したことが注目される。一般に「壺G」は、胴部が細身を呈し、口縁部がラッパ状に開き、底部は回転糸切り無調整のものである。このタイプは特徴的な形態を示し、さらにその生産の盛期が長岡京期（延暦3=784年～延暦13=794年）に該当するという年代観ももつことから、ある程度年代を知る手掛かりとなる。現在、「壺G」は秋山浩三氏によって形態・色調・胎土等よりA～Dの4群に分類されて各群について詳細な説明が加えられ、これらは產地の違いと理解されている（註7）。さて、本遺構より出土したものは完形品1個、この他の遺構からも少なくとも3個体以上出土している。本遺構出土のものを秋山氏の分類にあてはめてみると、A群に属するものと見られる。他の遺構出土のものについても、破片からの推察ではあるが、同群に位置づけられるものと考えられる。このA群は秋山氏の説明を引用すると「胴部が細長く、その下半部は弓形状を呈する。肩部はあまり張らず、加えて明瞭な稜線をなさない。口縁部は大きくラッパ状に外反して開き、端部は若干屈曲させるが原則的に丸くすなおに終る。外表面の仕上げは、あまり丁寧ではなく、小粘土塊や指紋が付着したままになっていることが多い。形態的な特徴に加えて最も個性的なものはその色調で、内外面は青味の強い灰青～青灰青色系であり、断面は赤茶色系を呈する。硬質焼成で、胎土中には少しばかり白色粒子等を含有する。本群は「壺G」の中で最も量が多く、一般的なもので、法量もほぼ一定である」という（註8）。次に「壺G」の類例について見ると、県内では未確認であり、本例が初めてのものと考えられる。なお、本遺構出土のものは、形態的には長岡京のS D12028・12031・12032溝跡出土のものに類似するという（註9）。

次に絵馬について記述したい。「壺G」と同一層内で長さ約23cmの板状のものに、前足、後足及び腹部が描かれた絵馬が出土した。前述の「壺G」と共伴する遺物の技法的な特徴から、概ね9世紀代のものと考えられる。つまりこの絵馬は古代に属するものと理解され、資料的にも大変貴重で特筆すべきものである。古代に属する絵馬を見ると、県内では出土例がなく、東北地方でもわずかに、秋田県仙北町払田柵遺跡第49次調査出土と、山形県川西町道伝遺跡出土の2例を数えるのみである。前者はS E550井戸跡、通称「ホイド清水」から出土したものであり、年代については8世紀末から9世紀頃と考えられている。後者は溝跡から出土したもので、9世紀の年代が与えられている。このように本例を含めても3例が知られるのみである。なお、前述の2遺跡は官衙及び官衙的性格を有する遺跡として知られている。

出 土 地	器 種	墨 書 銘	墨 書 部 位	備 考
整地層①	須恵器杯	「□」?	体部内面	小片
整地層③	須恵器杯	「丈」	底部外面	底部ヘラ描き
整地層③	須恵器杯	「井酒」	体～底部外面	
整地層③	須恵器杯	墨痕	底部外面	
整地層③	須恵器杯	「艮」	底部外面	
整地層③	須恵器杯	「□」	体部外面	墨痕小片
水田跡194ℓ-1	須恵器杯	「爻」	底部外面	
水田跡194ℓ-1	須恵器杯	「太」	体部外面	正位 小破片
水田跡194ℓ-1	須恵器杯	墨痕?	体部外面	内墨痕 小片
水田跡194ℓ-2	須恵器杯	「□」	底部外面	体～底
水田跡194ℓ-2	須恵器杯	墨痕	体部内面	正位 □～体
水田跡194ℓ-2	須恵器杯	「□」?	底部外面	体～底
水田跡194ℓ-3	須恵器杯	「□」?	底部外面	体～底
水田跡194ℓ-3	須恵器杯	「□」?	体部外面	体
水田跡194ℓ-3	須恵器杯	「位」「上」	体部外面	横位 □～体
水田跡194ℓ-3	土師器甕	「□」?	体部外面	体
水田跡194ℓ-3	須恵器・杯	「□」?	体部外面	体、黄橙色
水田跡194ℓ-3	土師器杯	墨痕	体部外面	
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「□」?	底部外面	漆付着
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「□」	底部外面	体～底
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	体部内面	
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「田」記号	底部外面	
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「土」?	体部外面	
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	底部外面	体～底
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「中」	底部外面	体～底
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	「尾張」	底部外面	研摩、小片
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	体部外面	倒位 □～体
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	体部外面	□～体
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	底部内面	小片
水田跡195ℓ-1	須恵器杯	墨痕	体～底部内外面	小片
水田跡196ℓ-1	須恵器杯	「矢田」	底部外面	体～底
水田跡196ℓ-1	須恵器杯	「+」	底部外面	体～底
SD200 ℓ-2	須恵器杯	「尾張」	体～底部外面	

表3 墨書土器一覧表（その1）

出土地	器種	墨書銘	墨書部位	備考
SD201 ♀-2	須恵器杯	墨痕	底部外面	
SD203 ♀-1	須恵器杯	「□」?	体部外面	
SD203 ♀-1	須恵器杯	「間間」「尾」	体・底部外面	横位
SD203 ♀-1	須恵器杯	「□八」	体部外面	正位
SD204 ♀-1	須恵器杯	墨痕	体部外面	墨痕あり
SD204 ♀-1	須恵器杯	墨痕	底部外面	3文字
SD204 ♀-1	須恵器杯	墨痕	底部外面	内研摩
SD205 ♀-2	須恵器杯	「□」記号	体部外面	
SD208 ♀-1	須恵器杯	「□」	体部外面	
SD209 ♀-1	須恵器杯	「導」?	底部外面	
SD209 ♀-1	須恵器杯	「□」	底部外面	内研摩
SD211 ♀-1	須恵器杯	墨痕	体・底部外面	
SD211 ♀-1	須恵器杯	「尾張」	体部外面	体～底
SD211 ♀-1	須恵器杯	墨痕	底部外面	
SD211 ♀-1	土師器甕	「□」?	体部外面	体
SK236 ♀-1	須恵器杯	「正」	底部外面	
SK236 ♀-1	須恵器杯	「-」	体部外面	
SK236 ♀-1	土師器杯	「□マ」「宮」	体部、体・底部外面	非口クロ
SK236 ♀-1	須恵器蓋合付杯	墨痕?	底部外面	
SK236 ♀-1	須恵器杯	墨痕	底部外面	内外墨痕
SK236 ♀-1	須恵器杯	「万」「□」	底部外面	ほぼ完形
SK236 ♀-1	土師器杯	「宮」「□」	体・底部外面	非口クロ
SK236 ♀-1	須恵器杯	「月」?	底部外面	
SK236 ♀-1	須恵器杯	「人」	体部外面	
SK236 ♀-1	須恵器杯	「+」	底部外面	ほぼ完形、付着物
SK236 ♀-1	須恵器杯	「+」?	体部外面	正位 完形
SK236 ♀-1	須恵器杯	「木口」	体部外面	横位 2か所
SK236 ♀-1	須恵器杯	「尾張」	体部外面	破片
SK236 ♀-1	須恵器杯	「人」?	底部外面	小破片
判ツトN排水路	須恵器杯	「大」	体・底部外面	正位
判ツトNWL-II	須恵器杯	「足」?	底部外面	
判ツトNWL-II	須恵器杯	「世」	体部外面	
判ツトNWL-II	須恵器杯	墨痕	底部外面	

表4 墨書土器一覧表（その2）

出土地	器種	墨書銘	墨書部位	備考
ガリットNWL-II	須恵器高台付杯	「長」	底部外面	体～底
ガリットNWL-II	須恵器杯	「二」?	底部外面	付着物
ガリットNWL-II	須恵器杯	「足」	底部外面	底
ガリットNWL-II	須恵器杯	「糸」	底部外面	体～底
ガリットNWL-II	須恵器杯	「甲」	体部外面	口～体
ガリットNWL-II	須恵器杯	墨痕	体部外面	口～体
ガリットNWL-II	須恵器杯	「□」?	体部外面	体
ガリットNCL-II	須恵器杯	「水鉢」	底部外面	
ガリットNCL-II	須恵器杯	墨痕	底部外面	
ガリットNCL-II	須恵器杯	「□」?	体部外面	口～体
ガリットNCL-II	須恵器杯	「□」?	体部外面	口～体
ガリットNCL-II	須恵器杯	「□」?	体部外面	体
ガリットNCL-II	須恵器杯	「井」?	体部外面	口～体
ガリットNCL-II	須恵器杯	「□」?	体部外面	
ガリットNCL-II	須恵器杯	墨痕	体部外面	体～底
ガリットNCL-II	須恵器杯	「□」?	底部外面	
ガリットEJL-II	須恵器杯	「伊」	体部外面	底部ヘラ描き「X」

表5 墨書土器一覧表（その3）

墨書土器

墨書土器は83点出土している。調査区の面積に比べて出土量の多さが窺える。出土遺構も様々で広範囲にわたっている。器種は圧倒的に須恵器が多く、全体の90%を占めている。これらの墨書土器の中には、遺構の性格を示すような資料は認められないが、「尾張」など地名を表すものもあり、他地域との交流関係を示すような資料が見られる。

墨書土器については、現象面からは数の多さが目立つが、このような状況が調査区内への多量の土器の混入（廃棄）行為によって引き起こされたものなのかどうかは不明である。

（註）

多賀城市埋蔵文化財調査センターが、本調査区西側で実施した第9次調査でも本調査区同様、多量の墨書土器が出土している。

- (註1)「第22次発掘調査」『多賀城跡調査研究所年報』1973 宮城県多賀城跡調査研究所(1974)
- (註2)『水入遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第84集 宮城県教育委員会(1982)
- (註3)『市川橋遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第4集 多賀城市教育委員会(1983)
- (註4)『市川橋遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第5集 多賀城市教育委員会(1984)
- (註5)『市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第8集 多賀城市教育委員会(1985)
- (註6)『市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第13集 多賀城市教育委員会(1987)
- (註7)『向日市埋蔵文化財調査報告書第18集』 向日市教育委員会(1986)
- (註8)(註7)同じ
- (註9)酒井清治氏の御教示による。

引用・参考文献

- 酒井清治「武藏国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館(1987)
- 外山政子「瓶について」『研究紀要』第4号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(1987)
- 奥野義雄「祈願船馬寸論」『奈良県立民俗博物館研究紀要』第6号 奈良県立民俗博物館(1982)
- 『長岡京跡』向日市教育委員会(1984)
- 「払田橋跡第46~52次発掘調査概要」『払田橋跡調査事務所年報』秋田県教育委員会(1982)
- 金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』(1988)
- 『富沢水田遺跡』仙台市文化財調査報告書第67集 仙台市教育委員会(1984)
- 『久ノ上遺跡』仙台市文化財調査報告書第79集 仙台市教育委員会(1985)
- 『富沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第113集 仙台市教育委員会(1988)
- 『富沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第114集 仙台市教育委員会(1988)
- 『道伝遺跡』川西町埋蔵文化財調査報告書第8集 川西町教育委員会(1984)
- 吉沢幹夫「宮城県出土の墨書き土器について」『研究紀要』第10巻 東北歴史資料館(1984)

写 真 図 版

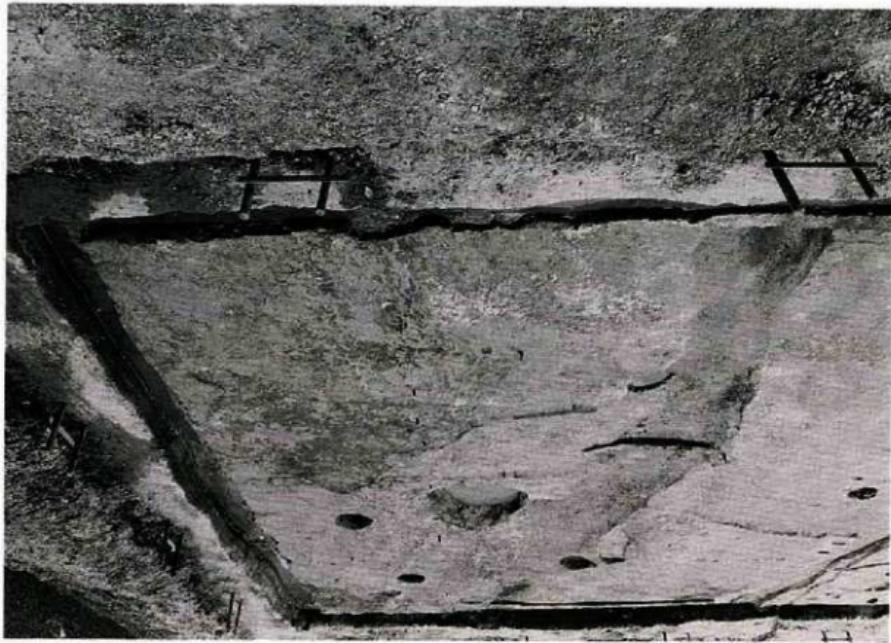


図版1 調査区全景（西より）



図版2 調査区全景（西より）

図版4 國策区全図(東半分)



図版3 國策区全図(北半分)



水田跡195(南東4)

図版7



水田跡194(南東4)

図版6



水田跡194(南東4)

図版5





図版 8
水田跡195(北より)

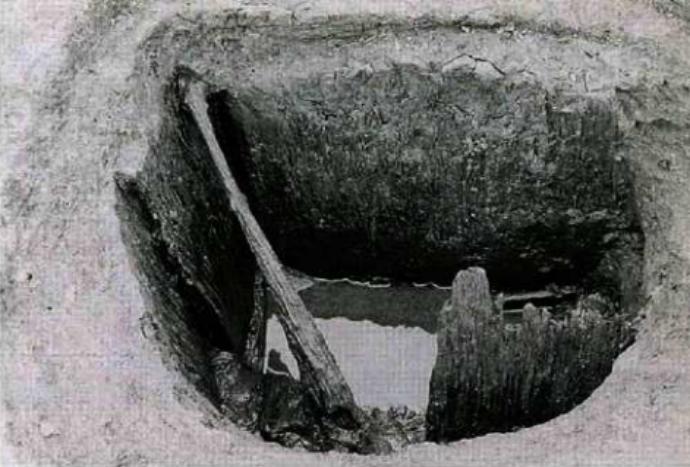


図版 9
水田跡195畦畔検出状況
(東より)

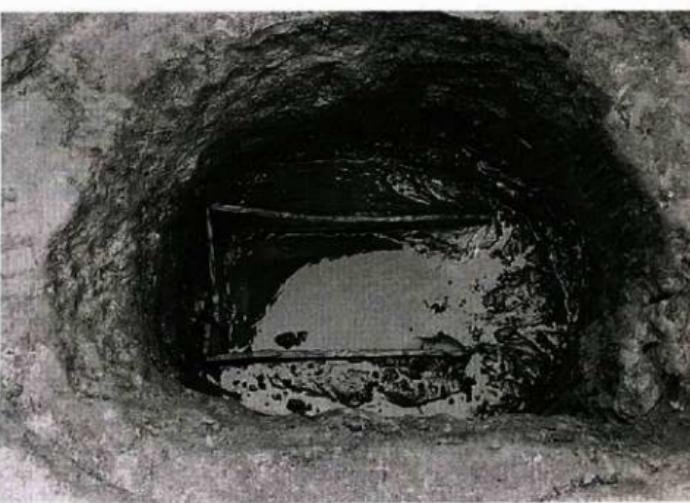


図版 10
水田跡196(西より)

図版11
SE 197検出状況
(南より)



図版12
SE 197 (南より)



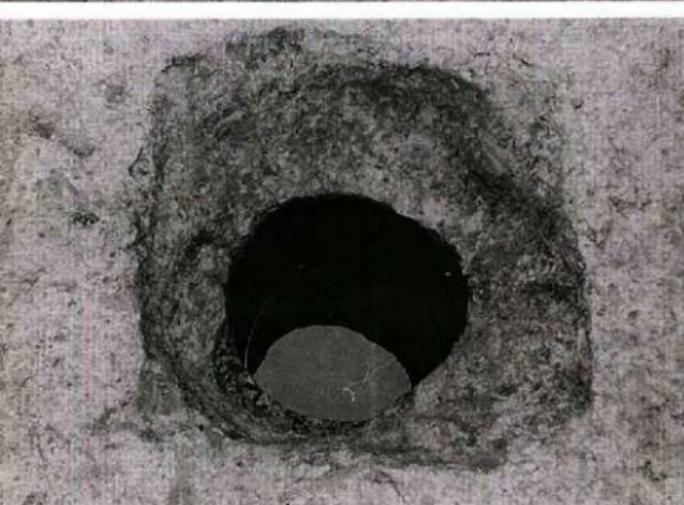
図版13
SE 197 (南より)



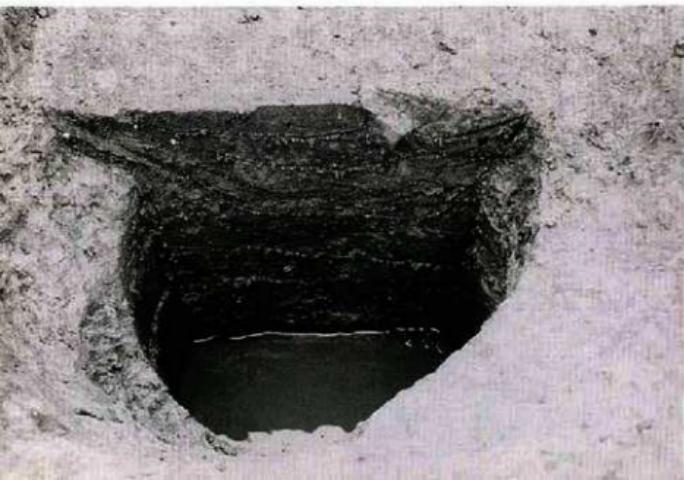
図版14
SE 197完掘状況（南より）



図版15
SE 198検出状況（南より）



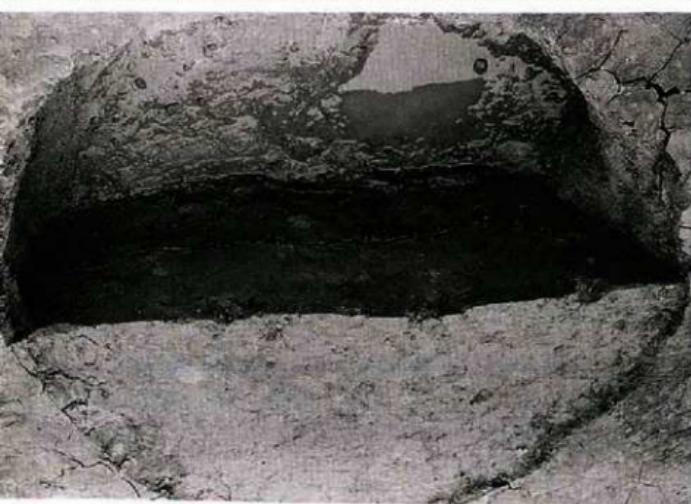
図版16
SE 198土層堆積状況（南より）



图版19 SK214壳壁状况(南支4)



图版18 SK213壳壁状况



图版17 SK213壳壁状况(西支4)



図版20
SK 214土層堆積状況



図版21
SK 232・233完掘状況（西より）



図版22
SK 234完掘状況（南より）



図版23
SK236完掘状況（南より）



図版24
SK236土層堆積状況
(南より)

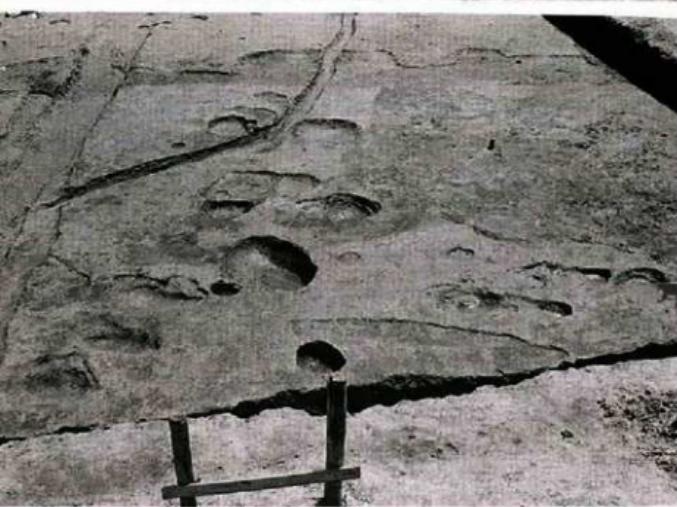


図版25
SK236遺物出土状況
(南より)

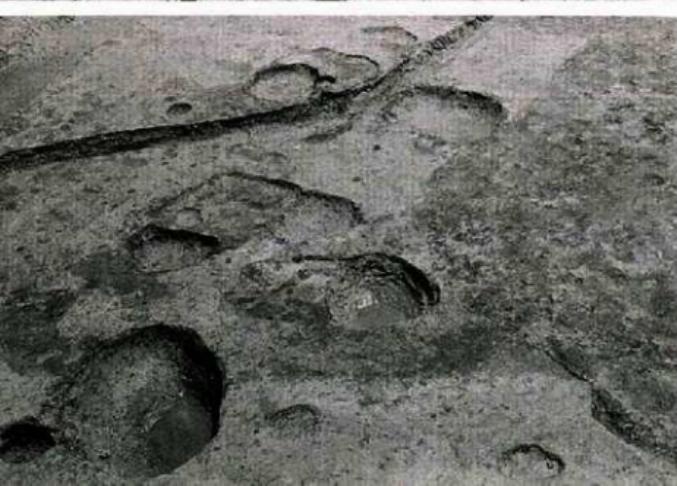




図版26
SK236遺物出土状況（南より）



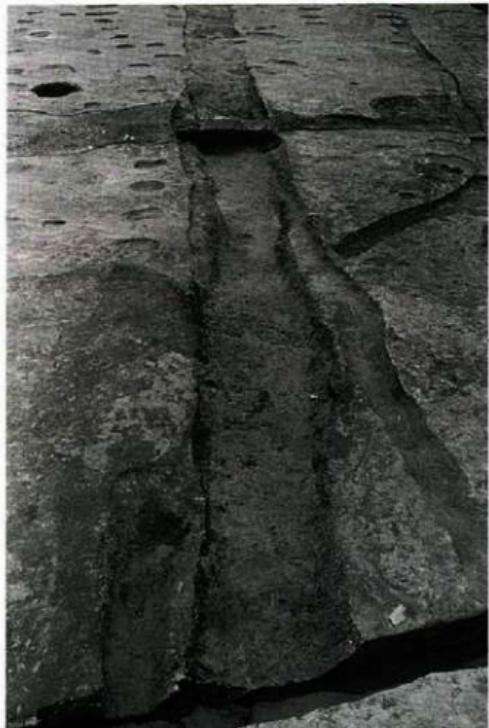
図版27
土塙群検出状況（西より）



図版28
土塙群検出状況（西より）



図版29 SD 199・200土層堆積状況（西より）



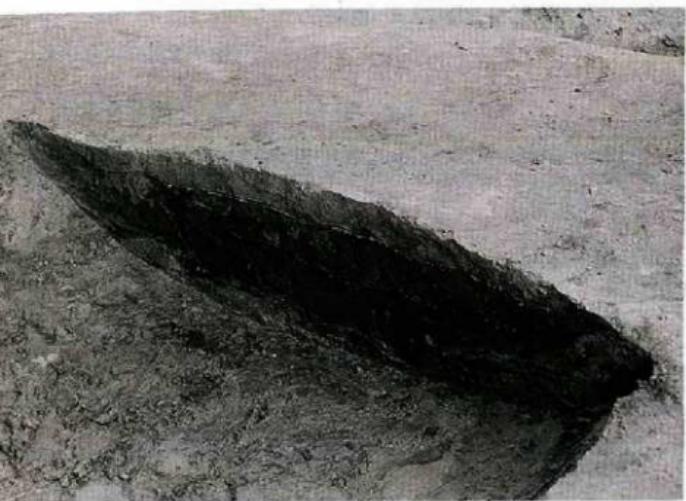
図版30 SD 199・200・202完掘状況（西より）



図版31 SD 204・205（北より）



図版32
SD 203土層堆積状況（南より）



図版33
SD 205土層堆積状況（南より）



図版34
SD 209・210完掘状況（北より）

市川橋遺跡第七次調査出土の漆紙文書について

平
川

國立歴史民俗博物館

南

一、祝文

者 土 □

「佐カ」
□者
番 □
〔前カ〕
□ 〔結カ〕

二、形状

漆塗りの作業として漆桶から漆をとり分けてパレットとして使用した土器の中の漆液にふた紙をしたもの、そのまま硬化したため、土器ごと棄てられたと考えられる。

現状は原形の半分強にある部分が遺存したと考えられ、漆紙の大きさは約六×八センチメートルをはかる。漆紙面は若干波打った状態で、発見時の状態では、墨痕は赤外線テレビカメラを使用しても二文字ほどがうすく確認できるにすぎない（図版A）。

三、文書解読作業の工程

墨痕は全体的に不鮮明ではあるが、周縁の一部で墨痕がわずかに鮮明に確認できる。このことから文字の遺存状態について二つの可能性が想定できる。

一つは全体的に表面が風化されて墨痕が失われている場合である。もう一つは表面に砂粒等が付着して文字を覆つてしまっているために文字が鮮明にみえない場合である。後者の場合は、おそらく漆に密着させてふた紙をした際に紙の表面

に漆が滲みで、そのまま乾ききらないうちに廻棄したために、表面に砂粒等が付着したものと推測できる。

結局、漆紙をよく観察すると表面に砂粒等が付着し、ざらついた状態となっていることから、後者の可能性が高いと判断した。

そこで付着した砂粒等を除去することにした。幸い、土器と漆が堅牢な状態であるので、メスを用いて砂粒等を削り取ることができた。その結果、図版Ⅲでわかるように、文字は肉眼でも判読可能なくらいに鮮明に見える状態となつたのである。

この作業はビデオに収めながら慎重に実施した。こうした作業を実施するためには、漆紙の状態を十分に観察した上、その作業工程を克明に記録しながら行わなければならない。とくに砂粒等を除去するといつても、漆で固められた状態であるので、かなりの力を加えないと除去できない。したがつて、漆紙そのものが安定した（堅牢）状態でないと削り取り作業は困難である。また漆の溶剤がない現状では、物理的に長時間かけてメス等で削り取るほかに、よい方法はないようである。



図① 多賀城跡第24次
調査出土木簡実測図

四、文書内容

現状では二行、六文字と（図版C）、「番」の右わきにおそらく追筆と思われる「□者」の一文字（図版D）、合わせて八字（図版C）を確認できる。行間は約一・六センチ、一文字の大きさは本文約一・六センチ、追筆約〇・七センチである。

文字の大きさからも、戸籍・計帳をはじめとする帳簿類ではなく、通常の文書と判断できるであろう。

篆文字しか遺存していないので、文書の内容を知るまでにいたらない。ここでは若干の解説を加えるにとどめたい。

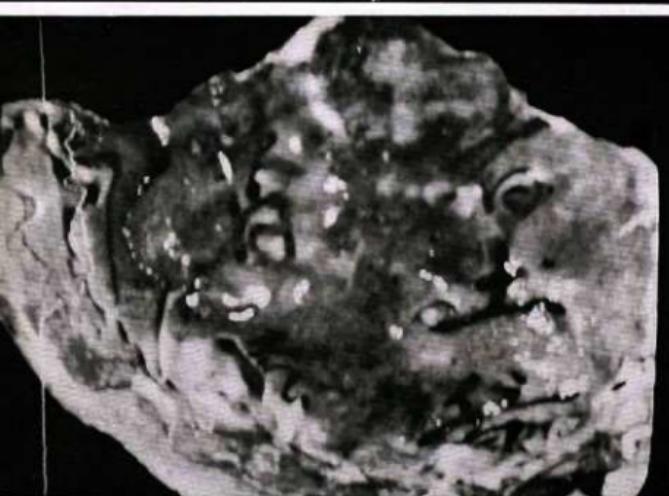
やわらかみのあるのがやかな書体である。一行目の「土」（図版E）は字形は「土」となっているが、「土」（写真では右わきに点のようなものが見えるが、これは欠損した部分である）ではないので、「土」と判読してよいのではないか。同様の例は、多賀城跡第四次調査^(註)（外郭東南隅地区）出土の木簡（図1）に「兵土」を「兵士」と記したものがある。一行目の「番」（図版F）の次の文字は旁は明らかに「吉」で（図版G）、「結番」などを連想すれば「結」も考えられよう。三行目の「一」（図版H）は上部を欠いているので、カムリが付けば「箭」となる場合もありえるであろう。

このようにみると、「番」や「土」などの文字からは、軍事関係文書の可能性が考えられるが、これだけの文字ではやはり不明としておくべきであろう。

(註)『宮城県多賀城跡調査研究所年報』一九七四 宮城県多賀城跡調査研究所（一九七五）



図版A



図版B



図版C

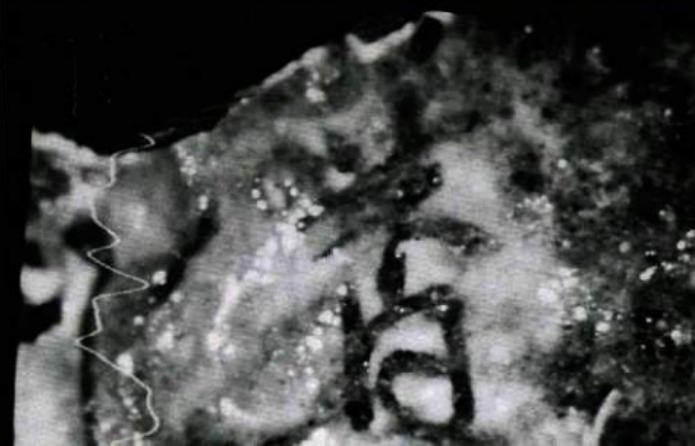
図版D



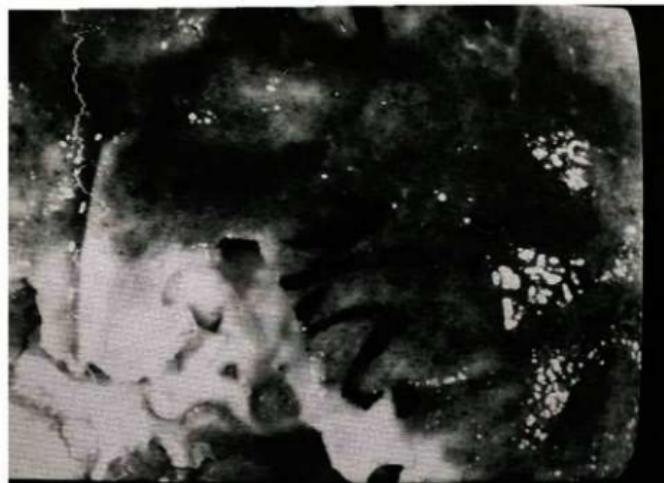
図版E



図版F



図版G



図版H



多賀城市文化財調査報告書第21集
市 川 橋 遺 跡
平成元年度発掘調査報告書

平成2年3月31日 発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発 行 多賀城市中央二丁目27番1号
TEL 022-368-0134

印 刷 (㈲)伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目1番7号
TEL 022-362-0805
